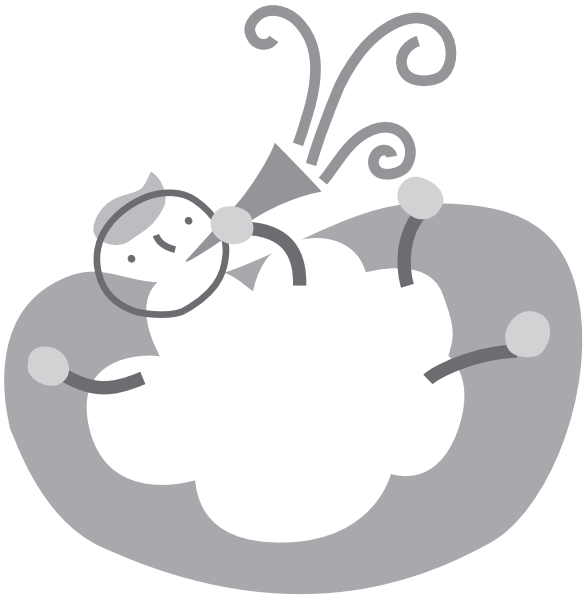
第 1 章

幼児の生活



＜表記について＞

幼児の生活時間は、子どもの年齢と就園状況に大きく影響される。第１章では年齢と就園状況にしたがって、以下の４つの群に分類し、分析を行っている。

「年少未就園児」＝１歳６か月～３歳10か月の未就園児
「年少保育園児」＝１歳６か月～３歳10か月の保育園児
「年長保育園児」＝３歳11か月～６歳11か月の保育園児
「幼　稚　園　児」＝３歳11か月～６歳11か月の幼稚園児

＊３歳11か月～６歳11か月の未就園児はサンプルが少ないため、分析からはずしている。
　ただし、「未就園児」と表記した場合は、１歳６か月～６歳11か月の未就園児すべてを指す。

1 生活時間

睡眠サイクル

就寝時間（図１－１～５）

近年、子どもたちが夜型になってきているとよく言われるが、実際はどうだろう。図１－１は就寝時間について95年調査と比較したものである。「10時以降」 と答えた人の総計は前回では34.5%なのに対して、 00年調査（以下今回調査）では44.3% になっている。ここからは子どもの生活が夜型になりつつある傾向が見られた。

◆ほとんど変化のない幼稚園児（図１－２）

３歳11か月～６歳11か月の幼稚園児（図１－２）：９時半頃までに就寝すると答えているのは前回の 80.9%と比べて、今回は 2.5ポイント下がって 78.4%となっている。５年前と比べて、あまり変化はなかった。

◆全体に就寝時間が遅くなっている保育園児（図１－３・４）

３歳11か月～６歳11か月の年長保育園児（図１－３）：「９時頃」では、今回は前回より大幅に減り、13.5 ポイントの差が見られた。一方、今回が前回より増えたのは「９時半頃」「10時頃」「11時頃」で、それぞれ 6.7 ポイント、9.3ポイント、 2.6ポイント増加している。また前回では、就寝時間は「10時頃」「９時頃」「９時半頃」が多かったのに対して、今回では「10時頃」「９時半頃」「10時半頃」に移り、前回と比べて、より「10時頃」に集中していることがわかった。

１歳６か月～３歳10か月の年少保育園児（図１－４）：９時半頃までに就寝する子は前回では53.6%だったが、今回では５割を切って、45.8%に減っている（7.8ポイント減）。一方、10時以降就寝する子は前回は45.6%だったが、今回は５割を超え、54.0%に増えている（8.4ポイント増）。

◆就寝時間が遅くなっている年少未就園児（図１－５）

１歳６か月～３歳10か月の年少未就園児（図１－５）：ほかのグループと違って、就寝時間のピークが限られた時間に集中せず、比較的広範囲にわたっていることは前回と同じである。しかし、前回の就寝時間の多い順は「９時半頃」「９時頃」「10時頃」「10時半頃」だったのに対して、今回は「10時頃」「11時頃」「９時頃」「９時半頃」である。また、今回が前回より増えているのは「11時頃」と「11時半以降」で、それぞれ7.3ポイントと4.0ポイントの増加が見られた。

図１－１　平日の就寝時間（95年との比較）

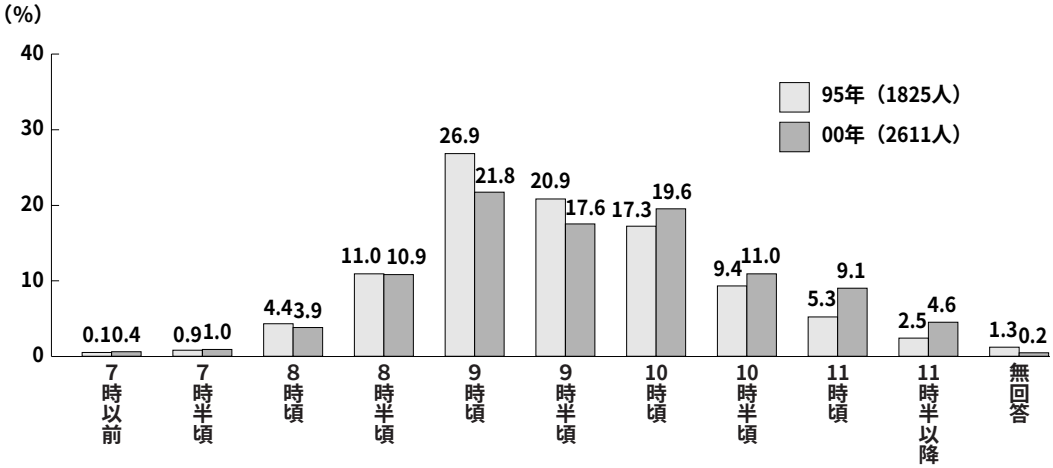


図１－２　幼稚園児（３歳11か月～６歳11か月）の平日の就寝時間（95年との比較）

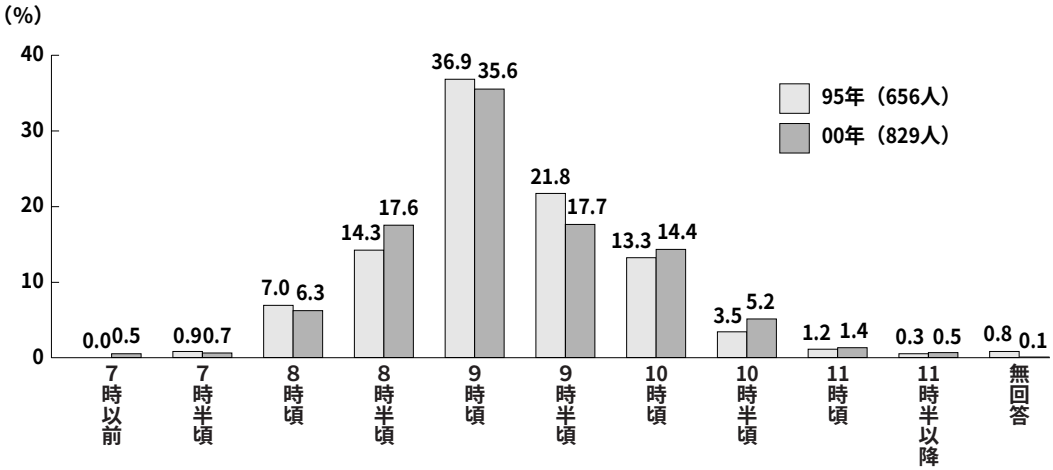
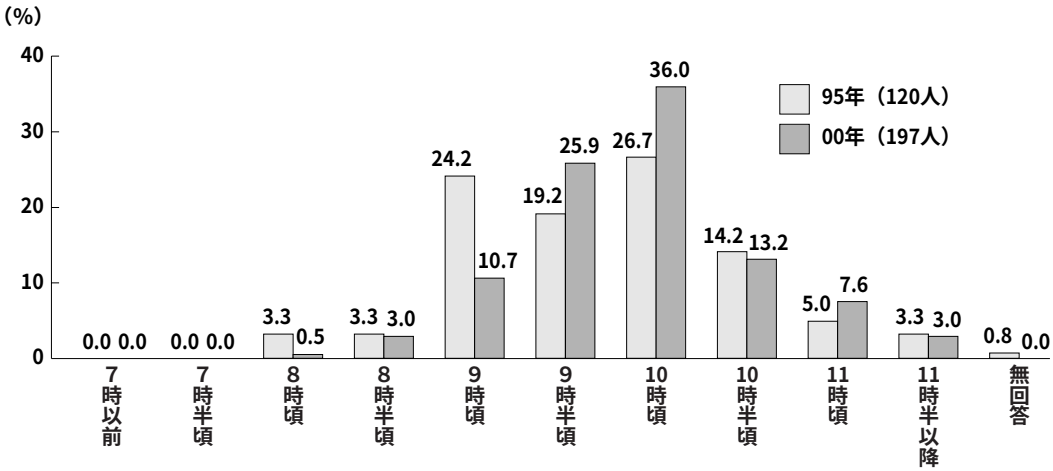


図１－３　保育園児（３歳11か月～６歳11か月）の平日の就寝時間（95年との比較）



◆就寝時間は幼稚園児より保育園児、年少未就園児の方が遅い傾向が見られる（図１－２～５）

幼稚園児と年長保育園児は同じ３歳11か月～６歳11か月の子どもだが、幼稚園児の就寝時間のピークが「９時頃」なのに対して、保育園児は「10時頃」である。保育園児は帰宅時間が幼稚園児より遅いので、夕食の時間も比較的遅く、その影響で就寝時間が幼稚園児より遅いことが推測できる。

年少保育園児と年少未就園児は同じ１歳６か月～３歳10か月の子どもだが、「11時頃」は年少保育園児が4.9%に対して、年少未就園児では16.1%となっている。保育園児は次の日の登園時間に就寝時間が左右されるために、「11時以降」就寝する子の割合が年少未就園児よりずっと少ない。

図１－４　保育園児（1歳6か月～3歳10か月）の平日の就寝時間（95年との比較）

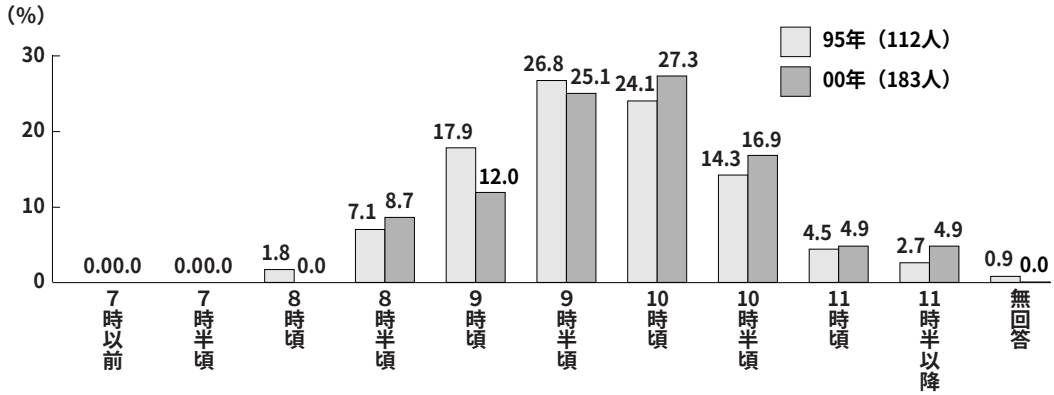
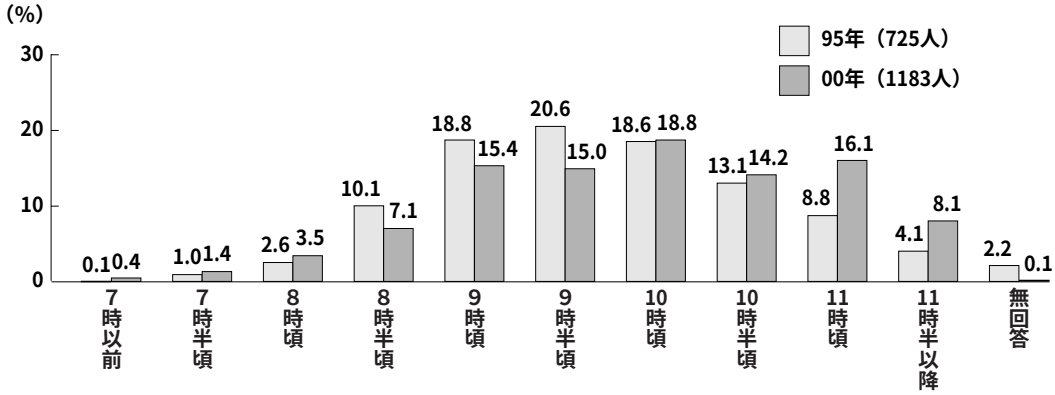


図１－５　未就園児（1歳6か月～3歳10か月）の平日の就寝時間（95年との比較）



起床時間（図１－６～10）

図１－６は起床時間について、前回と比較した全体の傾向を表している。７時半頃までに起床すると答えているのは、前回の59.5%から今回の63.3%と、3.8ポイント増えている。一方、「８時頃」は５年前より若干減り、「８時半頃」は若干増えている。したがって、起床時間が早くなった子どもも遅くなった子どももいると言えよう。

次に、就寝時間と同様の４グループに分けて、詳しく見てみよう。

幼稚園児（図１－７）：７時半頃までに起床するのは前回より9.2ポイント上がっているが、３歳11か月～６歳11か月の幼稚園児の起床時間の平均値をとってみると、５年前とあまり変わらなかった。

図１－６　平日の起床時間（95年との比較）

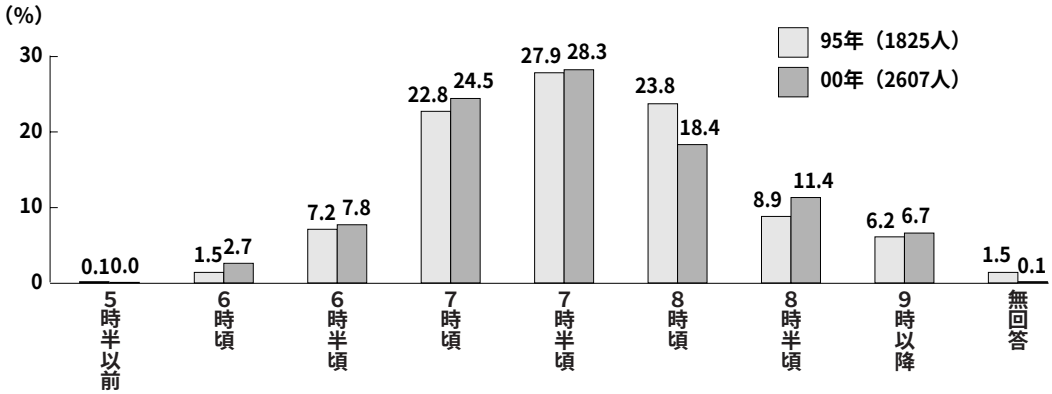
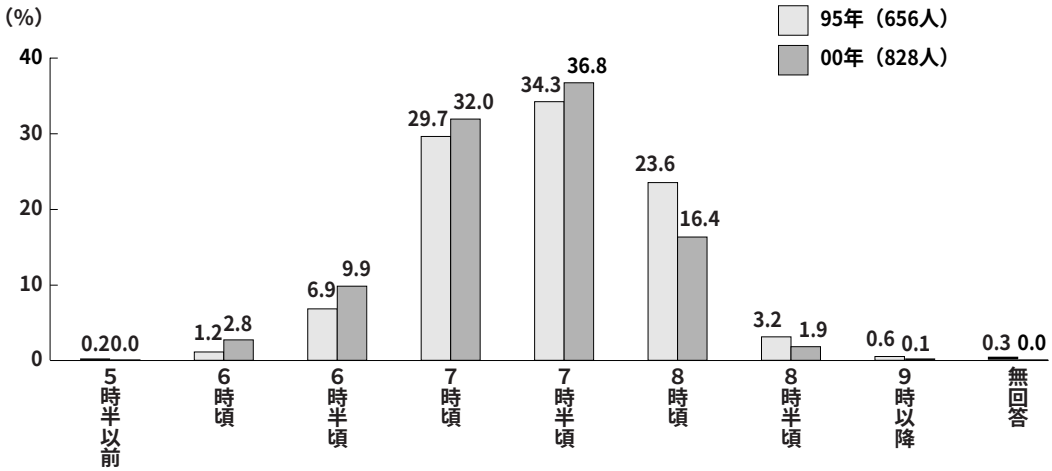


図１－７　幼稚園児（3歳11か月～6歳11か月）の平日の起床時間（95年との比較）



年長保育園児（図１－８）：前回と比べて、７時半頃までと答えているのは、今回の方が13.3ポイント上がっている。前回の起床時間のピークが「７時頃」「７時半頃」「８時頃」なのに対して、今回はより「７時頃」「７時半頃」に集中していることがわかった。

年少保育園児：図１－９の通りに、７時頃までに起床すると答えているのは、前回の48.8％から今回の54.9％と、6.1ポイント増えている。また起床時間のピークは前回の「７時半頃」「７時頃」「６時半頃」から「７時頃」「７時半頃」「６時半頃」と順位が入れ替わった。

図１－10は年少未就園児の起床時間である。前回と比較して、７時半頃までに起床すると答えている割合と８時以降起床との間にさほどの差がなかったものの、起床時間のピークが見られず、より広範囲にわたっていることがわかった。

幼稚園児と年長保育園児は同じ３歳11か月～６歳11か月の子どもだが、幼稚園児の起床時間のピークが「７時半頃」「７時頃」なのに対し、年長保育園児は「７時頃」「７時半頃」であることがわかった。

年少保育園児と年少未就園児は同じ１歳６か月～３歳10か月の子どもだが、年少未就園児の起床時間のピークが「８時頃」「７時半頃」「８時半頃」なのに対して、保育園児は「７時頃」「７時半頃」である。また実際それぞれの起床時間の平均値をとってみると、登園時間に左右される年少保育園児が年少未就園児より39分早起きすることがわかった。

睡眠時間について：４グループの就寝時間と起床時間のそれぞれ平均値をとって、それぞれの睡眠時間を計算してみた。５年前と比較してみると、幼稚園児は前回の10時間15分から今回の10時間６分と、睡眠時間が９分減少している。年長保育園児と年少保育園児は前回の９時間36分から今回の９時間21分と、15分減少している。年少未就園児は前回の10時間６分から今回の９時間57分と、９分減少している。

保育園児の睡眠時間が幼稚園児より45分も短いことから、就園状況の違いによって、子どもの生活時間がずいぶん違ってくることがわかった。

睡眠が不足している分は昼寝や土・日の休みで補っているのであろう。おそらく土曜日休みの普及が５年間の変化の背景にあると思われる。しかし、十分な睡眠時間は幼児の心身の発達に欠かせない大切なものである。昼寝をするといっても、早寝早起きという規則正しい基本的な生活習慣は幼児の段階で身につけさせることが必要である。

図１－８　保育園児（3歳11か月～6歳11か月）の平日の起床時間（95年との比較）

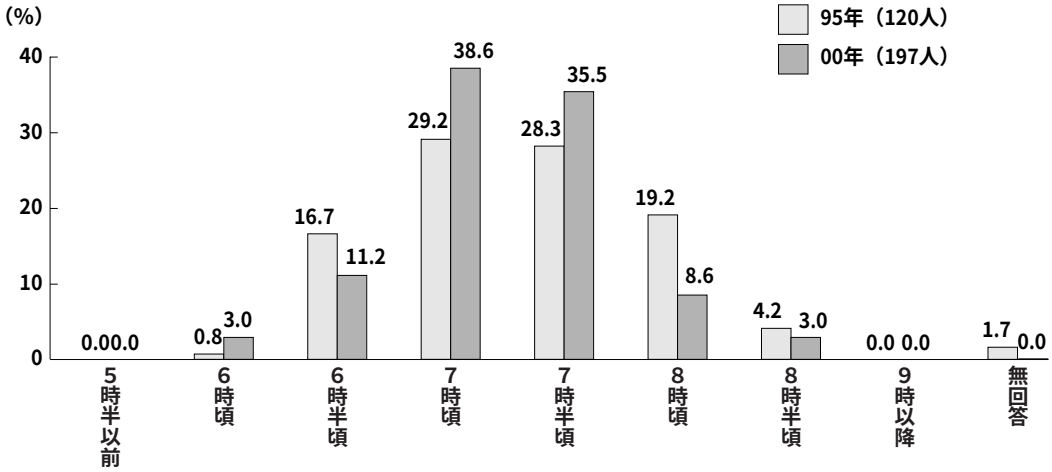


図１－９　保育園児（1歳6か月～3歳10か月）の平日の起床時間（95年との比較）

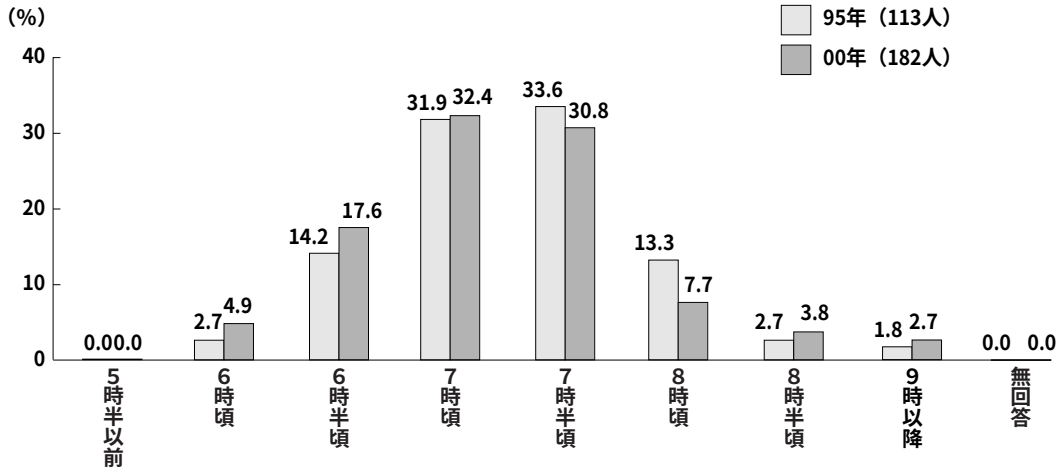
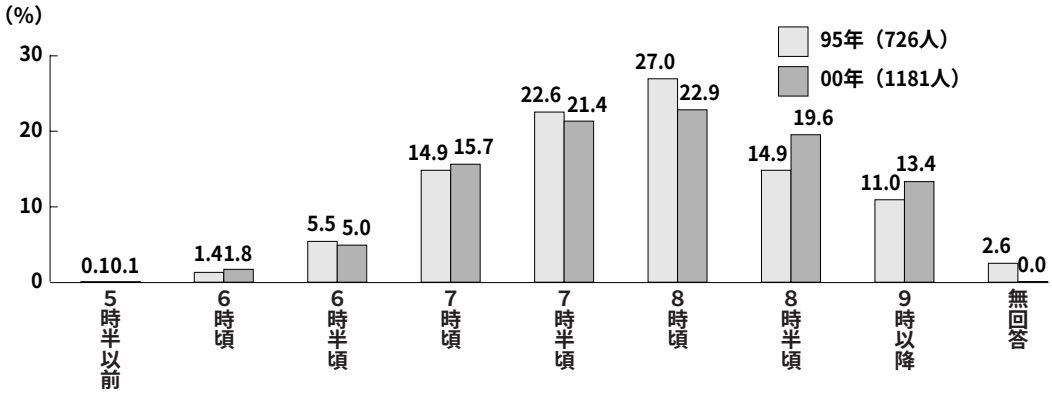


図１－10　未就園児（1歳6か月～3歳10か月）の平日の起床時間（95年との比較）



昼寝（図１－11・12、表１－１・２）

昼寝に関する質問は未就園児のみにたずねた。前回調査では無回答が多かったため経年比較はせず、今回の全体の結果のみ、かつ無回答を省いて分析したことをまずお断りしたい。

昼寝の有無をたずねた結果が図１－11である。回答者の７割弱の子どもが昼寝をしていることがわかった。

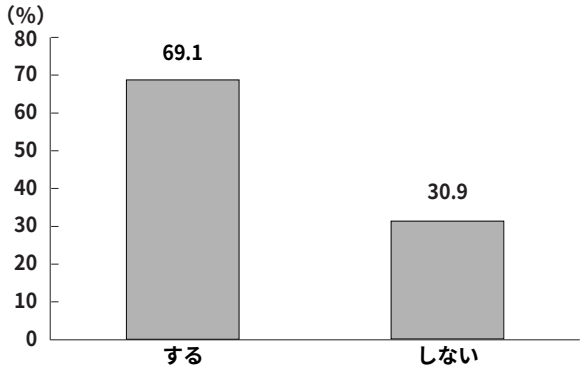
図１－12は年齢別昼寝有無の数値である（４歳児の回答数はわずかなため省いてある）。１歳児は９割強、２歳児は８割弱、３歳児は５割弱が昼寝をすると答えている。また、３歳児になると、昼寝を「する」と「しない」が逆転して、昼寝をしない子が５割を超えていることがわかった。

◆14時頃、２～2.5時間昼寝をする子どもが多い（表１－１・２）

では、１回目の昼寝の時間を見てみよう。何時頃昼寝をするのかを見ると、表１－１の通りに、1位は「14時」33.7%、２位は「13時」26.8%、３位は「15時」16.4%である。また、年齢別では、２歳児と３歳児は全体傾向を示している表１－１と全く同じ順位となっているのに対して、１歳児は１位から４位までは同じで、５位は「12時」で5.7%である。

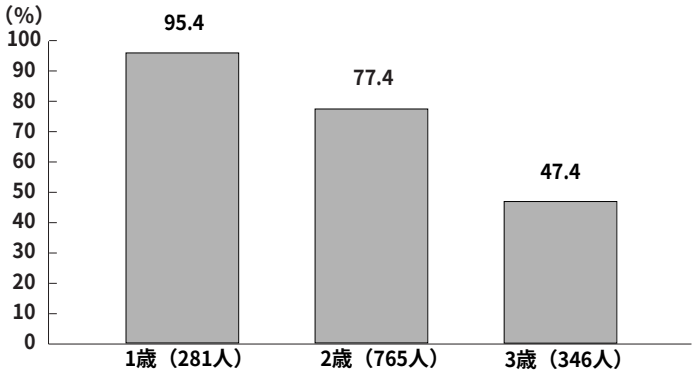
１回目の昼寝時間はどれくらいだろうか（表１－２）。１位は「２時間～２時間30分未満」38.5%、２位は「1時間30分～２時間未満」25.0%、３位は「１時間～1時間30分未満」20.1%である。１歳児から３歳児までの年齢別を見てみても、まったく同じ傾向であることがわかった。

図１－11　昼寝をする・しない（全体）



＊無回答を省いている
（回答数1507人）

図１－12　昼寝をする×年齢（全体）



＊無回答を省いている

表１－１　昼寝１回目・何時頃から（全体）

(%)

1位	14時	33.7
2位	13時	26.8
3位	15時	16.4
4位	16時	10.9
5位	17時	4.1

＊無回答を省いている
（回答数1030人）

表１－２　昼寝１回目・何時間何分（全体）

(%)

1位	2時間～2時間30分未満	38.5
2位	1時間30分～2時間未満	25.0
3位	1時間～1時間30分未満	20.1
4位	2時間30分～3時間未満	7.4
5位	3時間～3時間30分未満	5.9

＊無回答を省いている
（回答数1033人）

食　事

朝食（図１－13）

「何時頃朝食を食べますか」とたずねてみた。前回と同様に、朝食時間は７時半頃～８時半頃までに集中している。８時半頃までにほぼ８割の子が朝食をすませていることがわかった。５年前と比較して、大きな変化は見られなかった。今回調査の全体数値を見てみよう。図１－13は就園状況別に見た朝食時間である。幼稚園児と保育園児は７時頃～８時半頃までに集中している。幼稚園児は「８時頃」「７時半頃」「８時半頃」の順なのに対して、保育園児は「７時半頃」「８時頃」「７時頃」の順である。保育園児が幼稚園児より早く朝食をとることがわかった。未就園児については、７時半頃～９時頃までに集中し、「８時半頃」「８時頃」「９時頃」の順で、８時以降朝食をとる子が多いことがわかった。園に通う子どもが未就園児より、保育園児が幼稚園児より朝食をとる時間が早く、朝食をとる時間は保育園児が最も早い結果となっている。

「朝食にかかる時間」については、今回の全体数値を見ると、５割以上の回答者が「15分～30分未満」と答えている。

昼食（図１－14）

昼食については家庭でとっている未就園児だけにたずねてみた。「何時頃昼食を食べますか」の質問は数値的に変化があったものの、全体傾向としては前回と変わらなかった。ピークは、「12時頃」「12時半頃」「１時頃」という順になっている。

この質問について、今回の地域別のデータを見てみると（図１－14）、どの地域もピークは「12時頃」「12時半頃」「１時頃」と、傾向が同じである。しかし「12時頃」と答えているのは、大分市が45.8％に対して東京都が35.8％で、10.0ポイントの差があった。「１時半頃」と答えているのは、富山市が3.6％に対して埼玉県が10.7％で、7.1ポイントの差があった。全体的に地方は首都圏より昼食をとる時間が早いと言えよう。

「昼食にかかる時間」については、今回の全体数値を見ると、７割弱の回答者が「15分～30分未満」と答えている。

夕食（図１－15）

「何時頃夕食を食べますか」の項目を５年前と比較すると、前回では５割の子が６時半頃までに夕食をすませていたのに対して、今回では、６時半頃までが４割に下がり、５割以上の子が７時以降に夕食をとることがわかった。

では、就園状況別で見てみよう（図１－15）。「６時頃」と答えているのは、幼稚園児では前回より4.7ポイント増え、保育園児では7.1ポイント減り、未就園児では5.0ポイント減っている。逆に「７時半頃」と「８時頃」を合わせると、保育園児では前回より11.2ポイント、未就園児では7.5ポイント増えている。幼稚園児についてはあまり変化が見られなかった。未就園児は幼稚園児のように次の日の登園時間に束縛されることがないため、おとなの都合で夕食の時間を動かせるから遅くなったのだろう。保育園児については今回の調査から帰宅時間が遅くなったという結果も出ており、その影響で夕食が遅くなっているのではないだろうか。「夕食にかかる時間」は前回と比較して数値的には若干の変化があったものの、全体的な傾向は変わらなかった。５割の回答者が「15分～30分未満」、３割の回答者が「30分～45分未満」と答えている。朝食と昼食より少しゆっくりと食事をとっている傾向であることがわかった。

図１－13　朝食の時間×就園状況（全体）

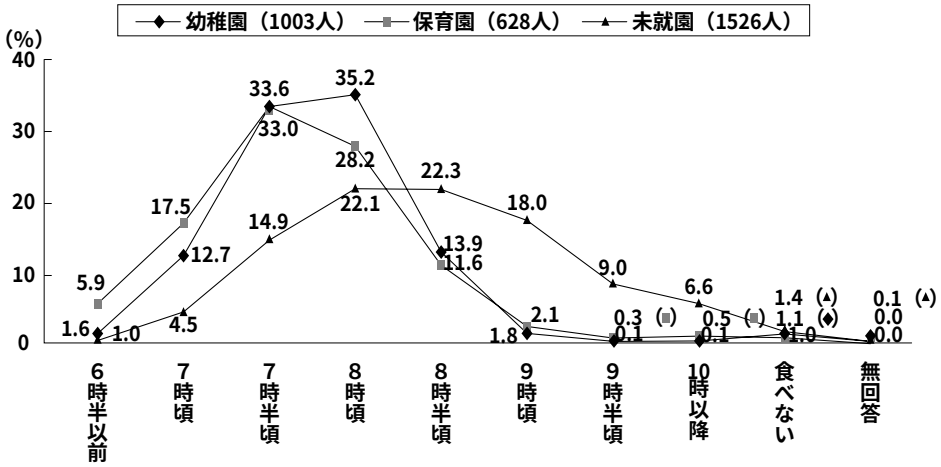


図１－14　昼食の時間×地域（全体）

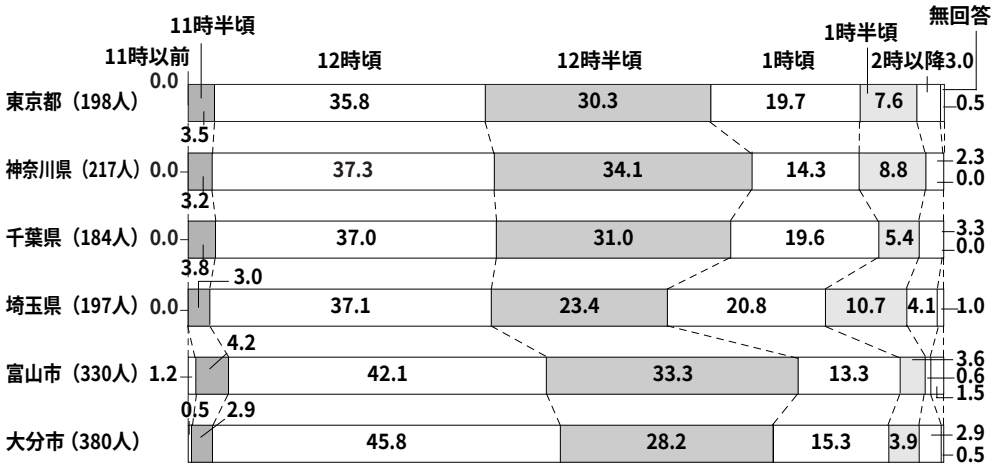
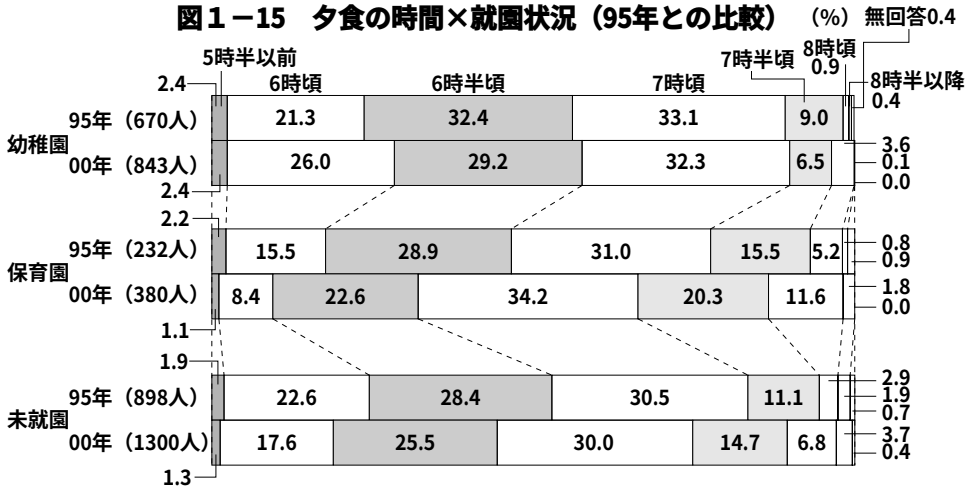


図１－15　夕食の時間×就園状況（95年との比較）



外　出

家を出る時間（図１－16）

この質問は幼稚園・保育園に通う子どもの保護者のみにたずねている。図１－16は保育園児と幼稚園児が家を出る時間についてそれぞれ前回と比較したものである。

前回と比べて、幼稚園児については、「８時頃」は3.9ポイント、「８時半頃」は4.1ポイント増え、「９時頃」は5.9ポイント減り、幼稚園児の家を出る時間がやや早くなっていることがわかった。

保育園児については、「７時半以前」は8.7ポイント、「８時頃」は5.1ポイント増え、「８時半以降」は減っている。「８時頃」までに家を出ると答えているのは、前回より13.8ポイントと大幅に増え、保育園児の家を出る時間がかなり早くなっていることがわかった。

では、５年前と比べて、早朝保育が増加しているのだろうか。平成６年と平成10年の「社会福祉施設等調査報告書」（厚生省大臣官房統計情報部編　財団法人厚生統計協会）で公開されている開所時刻を見ると、「7:00～7:59」は平成６年の71.3%から平成10年の79.0%へと、7.7ポイント増加している。近年、保育園の早朝保育が増加していると言えよう。

帰宅時間（図１－17）

これも幼稚園児・保育園児の保護者のみにたずねた質問である。図１－17は前回との比較である。保育園児の帰宅時間が幼稚園児より遅いことは当然であり、前回調査からもそういう結果が出ていた。今回は家を出る時間と同様に、それぞれ前回より帰宅時間が遅くなる傾向が見られた。

幼稚園児の帰宅時間を見てみると、「２時頃」は前回より10.9ポイント減り、「３時頃」は10.9ポイント増えている。帰宅時間のピークが、前回は「２時頃」「２時半頃」だったのに対して、今回は「２時半頃」「３時頃」に移っていき、30分遅くなったことがわかった。これは降園時間が遅くなったこと、また降園後、どこかに寄って、たとえば買い物をすませたり、子どもあるいは母親の友だちと少し遊んでから帰宅していることなどが推測できる。

保育園児の帰宅時間を見てみると、逆に、前回は「６時以降」と答えているのは23.7%だったが、今回は37.6%（「６時頃」が16.3%、「６時半頃」が12.4%、「７時以降」が8.9%）と著しく増えており、保育園児の帰宅時間が５年前と比較して、遅くなったことがわかった。

延長保育を行っている保育園が多くなったと推測できるが、実際に５年間の延長保育の増加率を調べてみた。平成６年と平成10年の「社会福祉施設等調査報告書」（厚生省大臣官房統計情報部編　財団法人厚生統計協会）で公開されている閉所時刻を見ると、「18:01～19:00」は平成６年の20.0%から平成10年の37.6%へと、17.6ポイント増加している。保育園の延長保育が大幅に増加していることがうかがえる。また帰宅時間が遅くなったことが保育園児の夕食時間に響いて、「７時半頃」「８時頃」に夕食をとる子どもが多くなったことにつながったと思われる。

図１－16　幼稚園・保育園に行くために家を出る時間×就園状況（95年との比較）

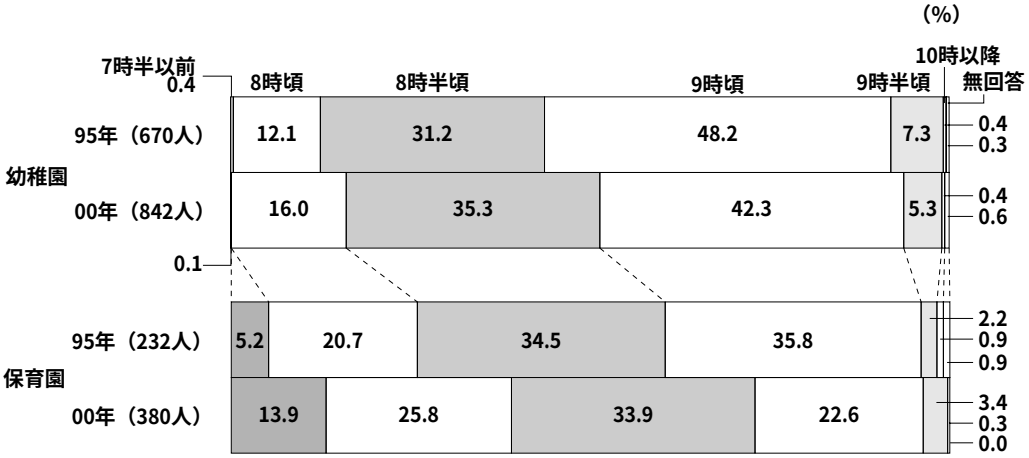
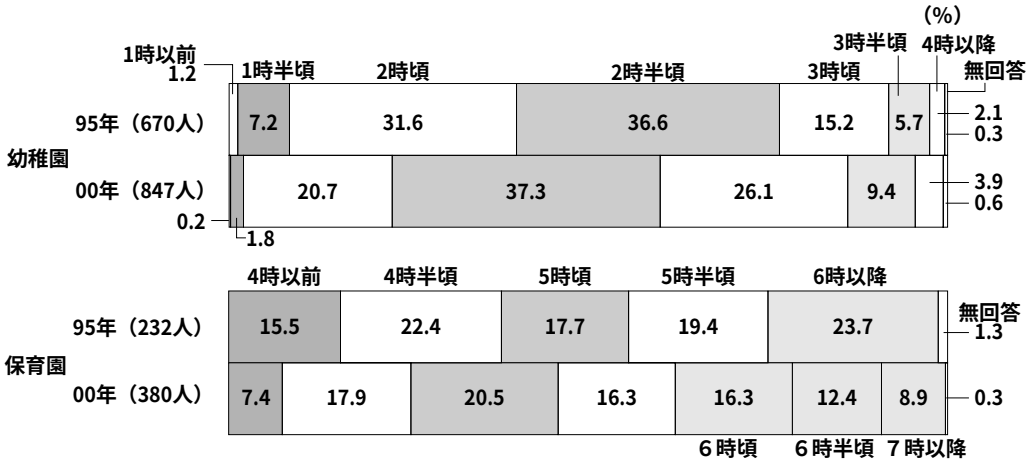


図１－17　幼稚園・保育園からの帰宅時間×就園状況（95年との比較）



登園以外の外出（図１－18～22、表１－３・４）

この項目は未就園児の保護者のみにたずねた。無回答が多かったため、それを省いて分析したことをまずお断りしたい。

外出している割合は95.7%で、これは前回の結果とほとんど変わらない。やはりいつ、どんな時代でも、じっと家にいる子はあまりいないのだろう。

１日のうちの１回目と２回目の外出時間について、今回調査の全体数値を見てみよう（図１－18）。

１回目の外出のピークは「10時」の40.2%で、次いで「11時」34.5%である。２回目の外出は「14時」24.8%、「15時」19.1%、「16時」15.4%、「13時」13.2%となっている。１回目と違って、２回目の外出のピークが限られた時間に集中せず、比較的広範囲にわたっていることがわかった。

では、１回目の外出の時間はどれくらいだろうか。前回と比較したものが表１－３である。表１－３を見てわかるように３位から５位までの順位は変わらず、「１時間30分」「30分」「３時間」となっている。また数値的にもほとんど差が見られなかった。

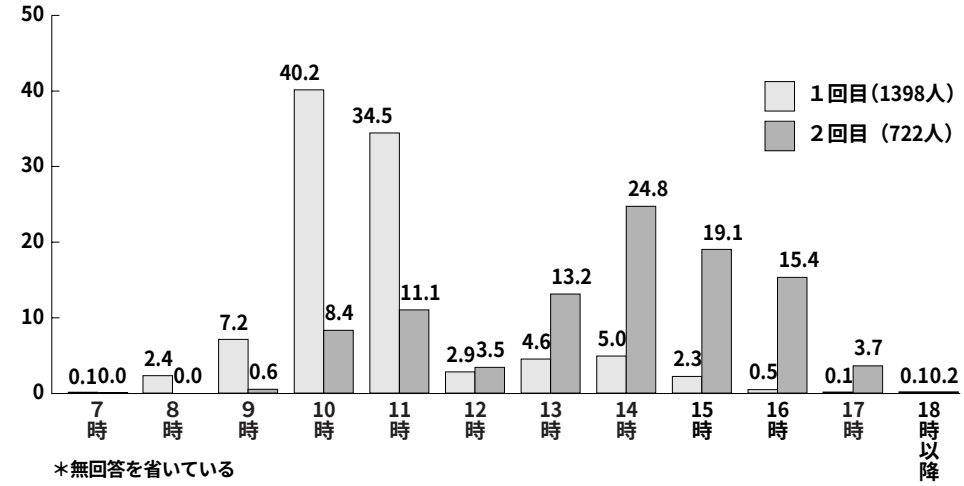
違ったのは前回１位の「２時間」（27.9%）で、今回は２位となった。しかし数値を見ると26.4%で、前回とさほどの差がなく、また前回２位の「１時間」（27.0%）は今回は１位（30.6%）となり、前回と比べて、１時間くらいの外出が少し増えているようである。

表１－４は２回目の外出時間についての前回との比較である。

１位から５位の順位については前回とまったく同じで、「１時間」「２時間」「30分」「１時間30分」「３時間」となっている。詳しくその割合を見ると、前回よりも「１時間」「１時間30分」外出する子が増え、「30分」「２時間」外出する子が減っていることがわかった。

全体的に見ると、外出時間の長さについては５年前と比べて、さほど大きな変化がなかったと言えよう。やはり外出時間は昼食、昼寝、夕食の時間に影響を与え、また左右されるので、それほど変化が起こるとは考えにくい。

図１－18　（１回目と２回目外出）何時頃から（全体）



＊無回答を省いている

表１－３　１回目外出・何時間何分（95年との比較）

（%）

95年（834人）			00年（1219人）		
1位	2時間	27.9	1位	1時間	30.6
2位	1時間	27.0	2位	2時間	26.4
3位	1時間30分	19.4	3位	1時間30分	18.5
4位	30分	8.4	4位	30分	7.4
5位	3時間	5.3	5位	3時間	7.0

＊無回答を省いている

表１－４　２回目外出・何時間何分（95年との比較）

（%）

		95年（480人）		00年（638人）
1位	1時間	34.6	＜	40.4
2位	2時間	20.0	＞	16.1
3位	30分	17.9	＞	13.8
4位	1時間30分	9.6	＜	11.6
5位	3時間	6.5		6.4

＊無回答を省いている

登園していない子はふだん誰とどこへ出かけているのだろうか。この項目は前回が単一回答、今回は複数回答になっているため、前回との比較を省き、今回の全体数値のみ、かつ無回答を除いて分析したことをまずお断りしたい。

図１－19は１回目と２回目の「誰と外出するか」について比較したグラフである。８～９割以上は１回目も２回目も「母親と外出する」と答えているが、２回目の「母親」は１回目より6.7ポイント下がっている。一方、２回目では、「きょうだい」「友だち」と外出するという回答が多くなり、それぞれ9.7ポイント、2.8ポイント上がっている。年齢別に見ても、まったく同じ傾向である。

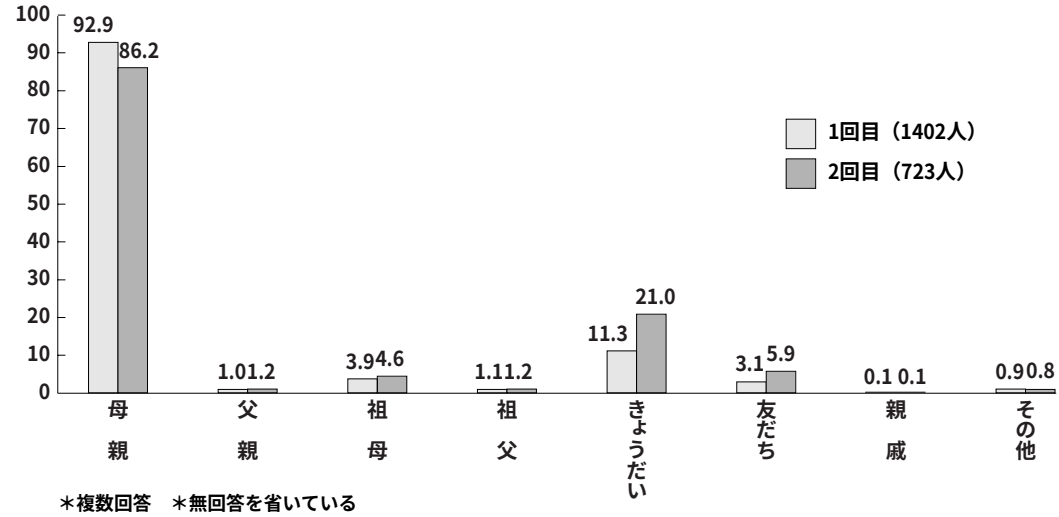
平日、父親は仕事のため家にいない。また核家族化で、祖父母と外出する機会が極めて少ないのも仕方がないかもしれない。きょうだいや友だちなどと遊んだりすることがあるものの、平日、子どもは母親以外の人との接触が少ないと言わざるを得ない。たくさんの人とのふれあいの中で他人を思いやる気持ちが育つとすれば、この数値を見ると、やはり子どもの成長にとって現在の社会はよい環境とは言えないのではないだろうか。最近では、子ども同士がふれあう機会をつくる努力をしている親が増えているようである。

では、どこへ出かけているのかを見てみよう（図１－20）。２回の外出とも「買い物」が「公園などの遊び場」より高い数値を示している。もちろん２回の外出とも公園などで遊んで、母親の買い物に子どもがつきあわされていることが推測できる。特に２回目の外出は、「買い物」の数値が「公園などの遊び場」を15.1ポイント上回っている。また、２回目の外出では「友だちの家」の回答が多くなり、１回目の外出との間に9.1ポイントの差が見られた。

次に、１歳児と３歳児の２回の外出先を比較してみよう（図１－21・22）。

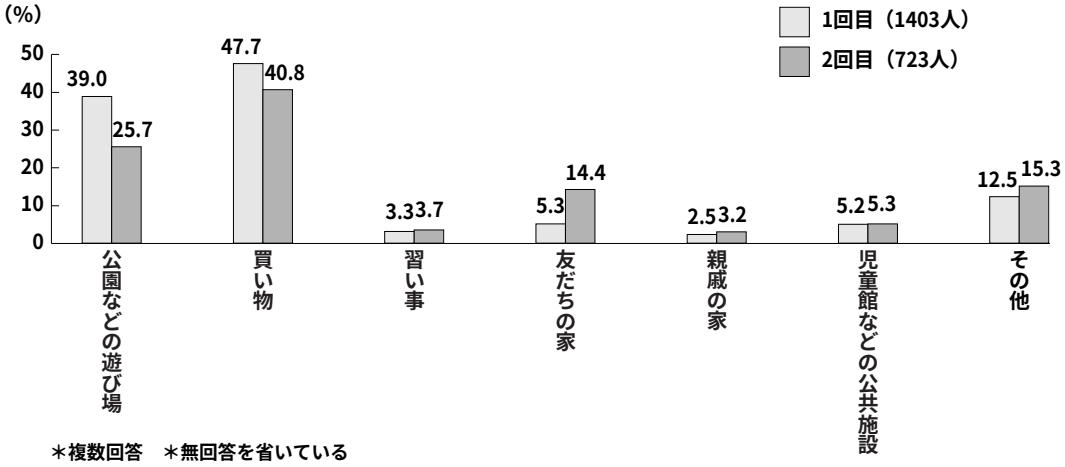
全体の傾向では１歳児も３歳児も変わらないが、２回目の外出の「買い物」を見ると、１歳児では46.2%、３歳児では41.1%と、5.1ポイントの差が見られた。その代わりに、３歳児では「習い事」「友だちの家」という回答が１歳児より多く、１歳児の２回目の「習い事」より7.2ポイント、「友だちの家」では4.1ポイント高い。子どもが大きくなるにつれ、他者とのかかわりが必要になる。公園のみでは十分でないので、友だちの家に行って遊んだり、習い事に行ったりするようになるのだろう。図１－22から、３歳になると徐々に習い事に行くようになっていることがうかがわれる。

図１－19　（１回目と２回目外出）誰と（全体）



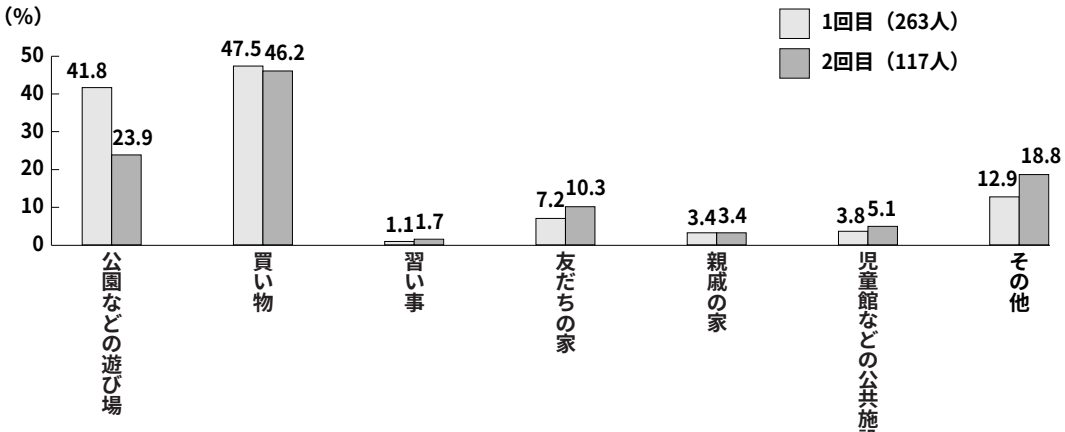
＊複数回答　＊無回答を省いている

図１－20 （１回目と２回目外出）どこへ（全体）



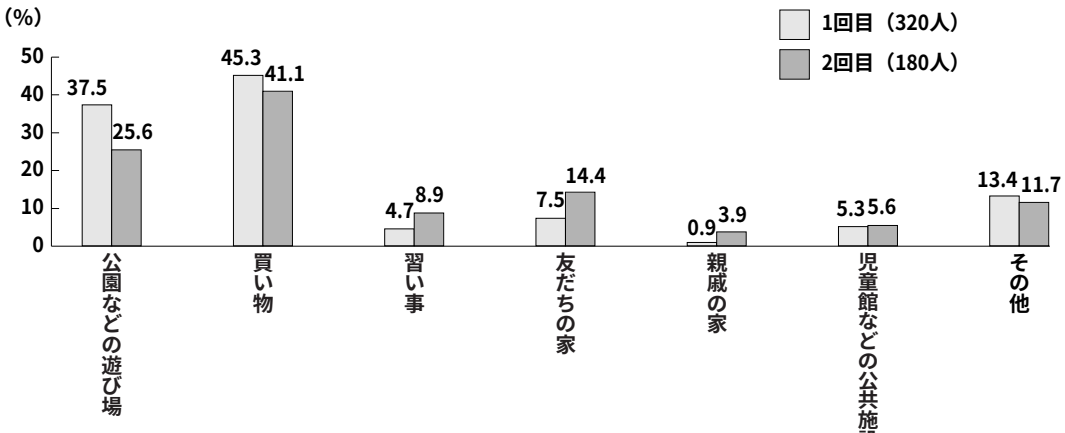
＊複数回答　＊無回答を省いている

図１－21 （１回目と２回目外出・１歳児）どこへ（全体）



＊複数回答　＊無回答を省いている

図１－22 （１回目と２回目外出・３歳児）どこへ（全体）



＊複数回答　＊無回答を省いている

2 習い事・おけいこ事の現状

前回との比較（図１－23）

幼児期における習い事・おけいこ事（以下「習い事」）は、前回と比較してどのように変化しているのだろうか。

図１－23は、年齢別にしている習い事の割合を前回と比較して見たものである。１歳児が最も増加した割合が多く（14.0ポイント）、その後、年齢が上がるごとに、５年前との差は縮んでいく。４～６歳児ではほとんど５年前との差は見られない。

今回の数値を見ると、３歳児の段階で、何らかの習い事をしている子どもは約半数おり、５・６歳児で約８割に達している。小学校に上がる前には、ほとんどの子どもが習い事をしている状況である。

習い事・おけいこ事の種類（図１－24）

どのような習い事をしているのか、複数回答でたずねた結果を前回と比較したのが図１－24である。前回より増加した主な習い事は（調査対象に弊社通信教育の会員を含んでいるため、「月１回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」を除いて）、「児童館などの公共施設を利用した活動」（1.4ポイント）、「一括購入の通信教育」（2.0ポイント）、「そろばん」（0.2ポイント）であった。いずれも５年前との差は５ポイント以内であり、大きな差は見られない。

一方、減少したのは、上記の３つの習い事と「英会話などの語学の教室」（前回と同数値）を除いたすべての習い事である。特に５ポイント以上減少したのは、「スイミングスクール」（9.1ポイント）と「幼児向けの音楽教室」（5.5ポイント）であった。

習い事は、男女差による影響が大きいと考えられるため、男女差の傾向を次に見てみたい。

図１－23　習い事をしている割合×年齢（95年との比較）

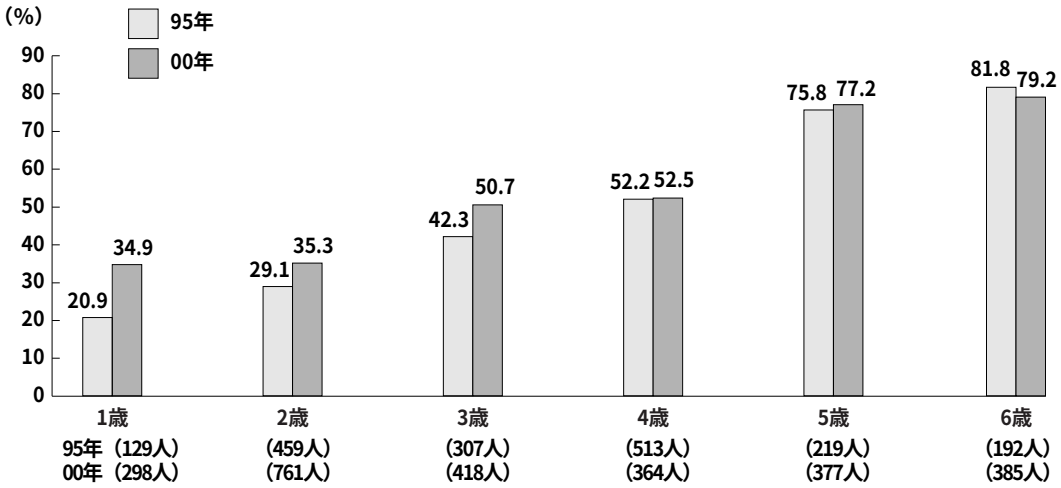
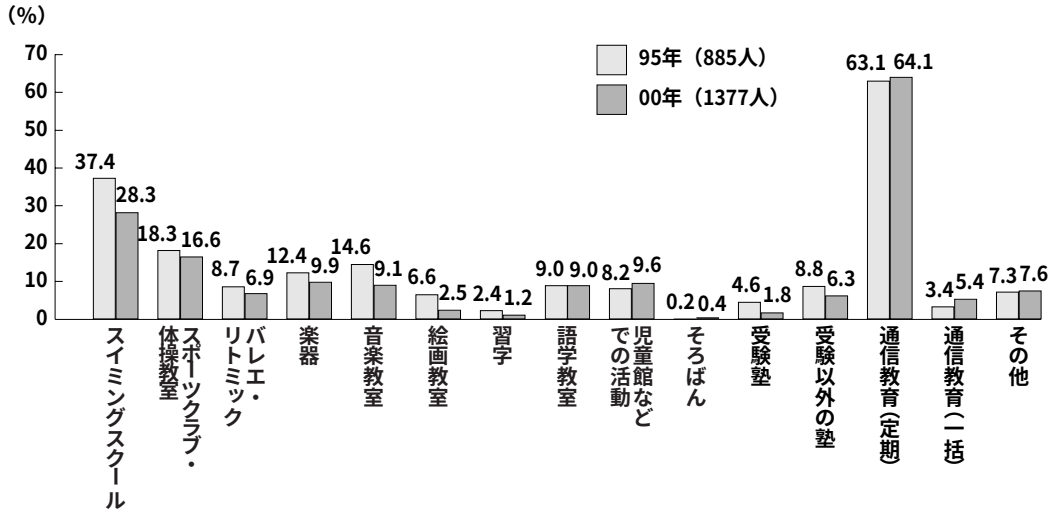


図１－24　習い事の種類（95年との比較）

＊複数回答



今現在の習い事・おけいこ事について（図１－25）

図１－25は、どのような習い事をしているかを複数回答でたずねた今回調査の全体数値である。今現在している割合が最も高いのは、１位が「スイミングスクール」28.6%で、２位が「スポーツクラブ・体操教室」14.4%、３位が「楽器」12.1%であった（定期の通信教育を除く）。

男女差が大きい習い事では、男子は女子よりも「スイミングスクール」（10.4ポイント）、「スポーツクラブ・体操教室」（7.2ポイント）が多く、逆に女子は男子よりも「楽器」（12.9ポイント）、「音楽教室」（6.4ポイント）、「バレエ・リトミック」（8.4ポイント）が多い。

男子はスポーツ系、女子は音楽系（表１－５）

今現在している習い事の種類をたずねた結果を男女別・年齢別に見たのが表１－５である。１～３歳児ではあまり男女に違いはみられず、どちらも上位にあがっているのは、「スイミングスクール」「児童館などでの活動」「音楽教室」「一括の通信教育」「スポーツクラブ・体操教室」などである。４歳児以上になると、男子と女子の傾向が分かれる。たとえば６歳児男子の場合は、１位「スイミングスクール」44.2%、２位「スポーツクラブ・体操教室」23.8%、３位「語学教室」15.5%、４位「楽器」11.0%である。一方、女子では、１位「楽器」41.0%、２位「スイミングスクール」33.1%、３位「音楽教室」13.3%、４位「習字」12.7%となっている。４割を占める習い事が、男子ではスポーツ系で、女子では音楽系となる。

４～６歳児で、２割を超える習い事は、男子では「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」といったスポーツ系が占め、女子では「楽器」「スイミングスクール」といった音楽系とスポーツ系が占めている。

図１－25　習い事の種類×性（全体）

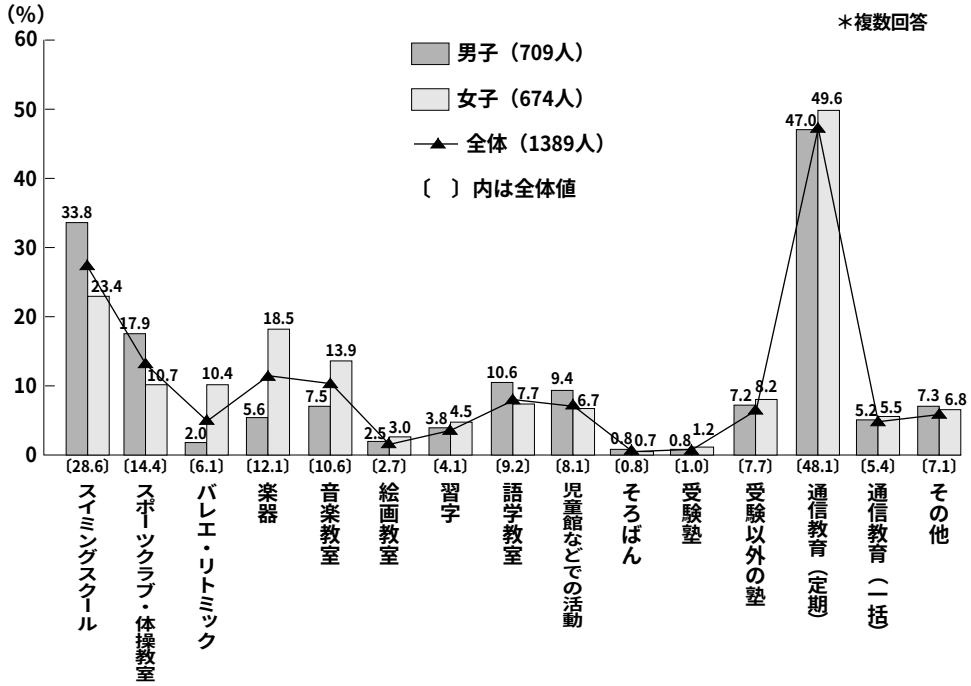


表１－５　習い事の種類×性・年齢（全体）

(%)

男子	1歳（50人）	2歳（113人）	3歳（86人）	4歳（109人）	5歳（168人）	6歳（181人）
1位	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ16.0	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 21.2 児童館 21.2	児童館 29.1	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 28.4	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 44.0	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 44.2
2位	児童館 12.0		ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 24.7	体操教室 13.8	体操教室 28.6	体操教室 23.8
3位	体操教室 10.0	通信一括 13.3	その他 14.0	語学教室 12.8	音楽教室 11.3	語学教室 15.5
4位	その他 8.0	その他 7.1	音楽教室 12.8	児童館 7.3	語学教室 10.7	楽器 11.0
通信定期	68.0	53.1	45.3	47.7	42.3	42.0

女子	1歳（30人）	2歳（119人）	3歳（117人）	4歳（96人）	5歳（145人）	6歳（166人）
1位	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 13.3	児童館 10.9	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 17.9	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 24.0	楽器 31.7	楽器 41.0
2位	ﾊﾞﾚｴ・ﾘﾄﾐｯｸ6.7 児童館 6.7 通信一括 6.7	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 10.1	児童館 17.1	音楽教室 15.6 ﾊﾞﾚｴ・ﾘﾄﾐｯｸ15.6	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 29.7	ｽｲﾐﾝｸﾞｽｸｰﾙ 33.1
3位		音楽教室 9.2	音楽教室 15.4		体操教室 19.3	音楽教室 13.3
4位		通信一括 8.4 ﾊﾞﾚｴ・ﾘﾄﾐｯｸ8.4	体操教室 11.1 ﾊﾞﾚｴ・ﾘﾄﾐｯｸ11.1 通信一括 11.1	楽器 9.4 受験以外塾 9.4 その他 9.4	音楽教室 18.6	習字 12.7
通信定期	86.7	68.1	53.0	42.7	38.6	41.0

＊複数回答

3　幼児を取り囲む家庭環境

テレビとのかかわり

子どもの生活時間において、テレビとのかかわりは大きな影響を及ぼしている。その実態を前回と比較しながら見ていきたい。

テレビ視聴への興味・関心・頻度（図１－26～28）

図１－26は、テレビ視聴への興味・関心についてたずねた結果を前回と比較したものである。５年前も今現在も数値の変化はほとんどなく、「見たい番組が大体決まっている」子どもが約８割を占めている。

さらにテレビへの興味・関心について、今回の全体数値を年齢別に見たものが図１－27である。１歳児の段階で、すでに「内容をいくぶん理解しはじめている」子どもが３割おり、「見たい番組が大体決まっている」子どもが半数を占めている。「見たい番組が大体決まっている」割合は、年齢が上がるにつれて増加しており、６歳児ではほとんどの子ども（96.3%）が「見たい番組が大体決まっている」と回答している。

図１－28は、テレビ視聴の頻度についてたずねた結果の前回との比較である。テレビ視聴に対する興味・関心と同様に、前回と比較して数値に大きな変化は見られない。96～97%が「ほとんど毎日」テレビを視聴している状況である。年齢別に見ても、この傾向に変わりはなく、１～６歳児までほとんどの年齢で９割以上が「ほとんど毎日」テレビを視聴している。

図１－26　テレビ視聴への関心度（95年との比較）

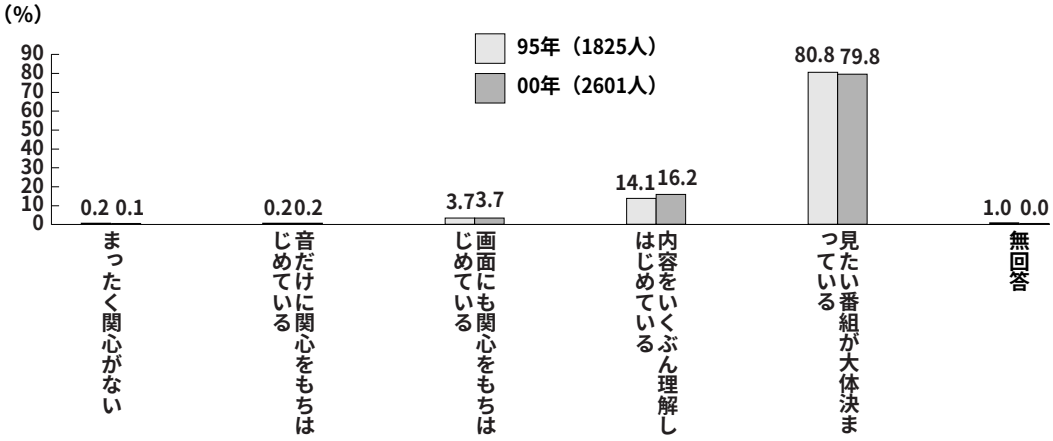


図１－27　テレビ視聴への関心度×年齢（全体）

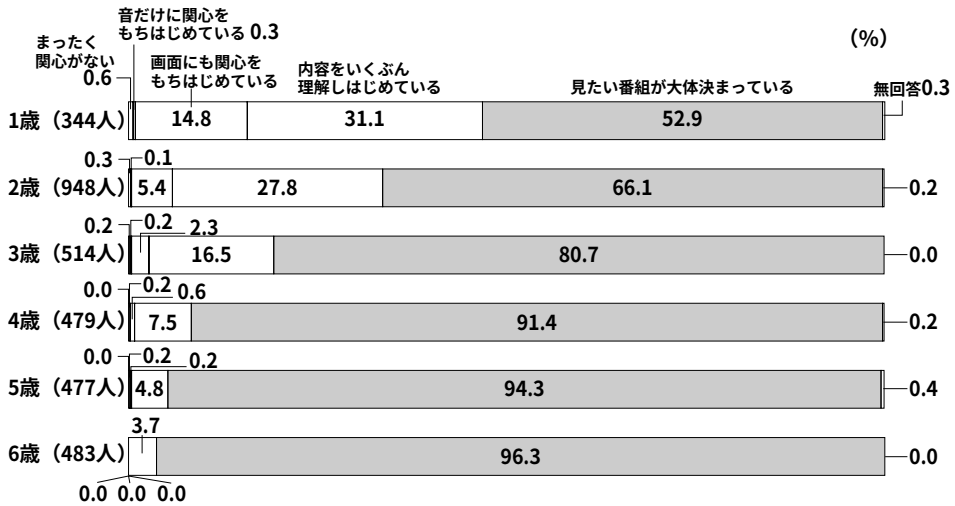
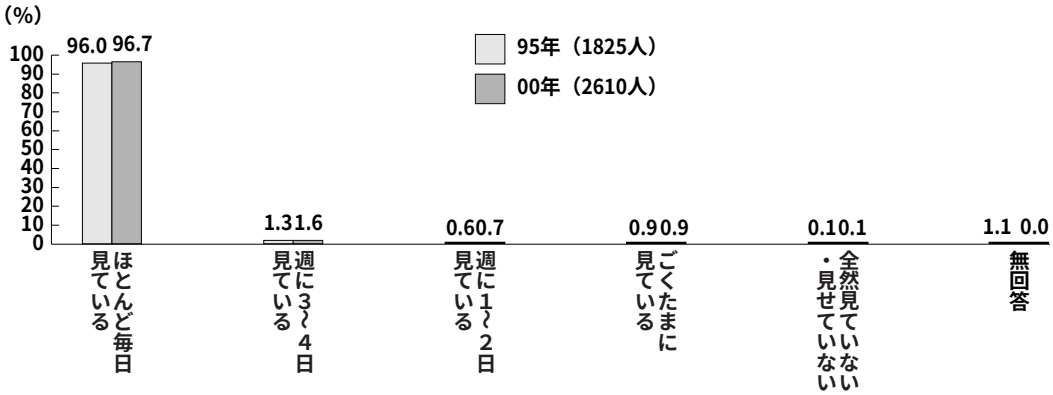


図１－28　テレビ視聴頻度（95年との比較）



１日の平均視聴時間・時間帯（表１－６、図１－29）

では、子どもは１日に何時間くらいテレビを視聴しているのだろうか。表１－６は、１日当たりの平均視聴時間を年齢別に前回と比較したものである。視聴時間においても、あまり前回からの変化は見られない。前回と比較して、最もテレビ視聴時間が増えたのは６歳児で、２時間58分（20分増加）であった。前回と同様に、年齢ごとの差では、１～３歳児の視聴時間が４～６歳児に比べて長い。これは、幼稚園入園とともにテレビを視聴する時間が減少するためと思われる。

図１－29は、１日のテレビ視聴時間帯をたずねた結果の前回との比較である。１日のうち、朝と、夕方から夜にかけて視聴率の２つの山が見られる。前回と比較すると、朝のピーク時間は若干早まり、夕方から夜にかけては17時～19時半頃に集中していた山が崩れ、16時～20時頃まで広範囲になっている。

朝の視聴時間帯の変化は、起床時間の多少の早まりと連動しており、また夕方から夜の視聴時間の広がりは、園からの帰宅時間の変化や幼児（子ども）番組の放送時間に影響していると考えられる。

就園状況別視聴時間帯（図１－30）

図１－30は、今回調査の全体数値についてテレビ視聴時間帯を子どもの就園状況別に見たものである。

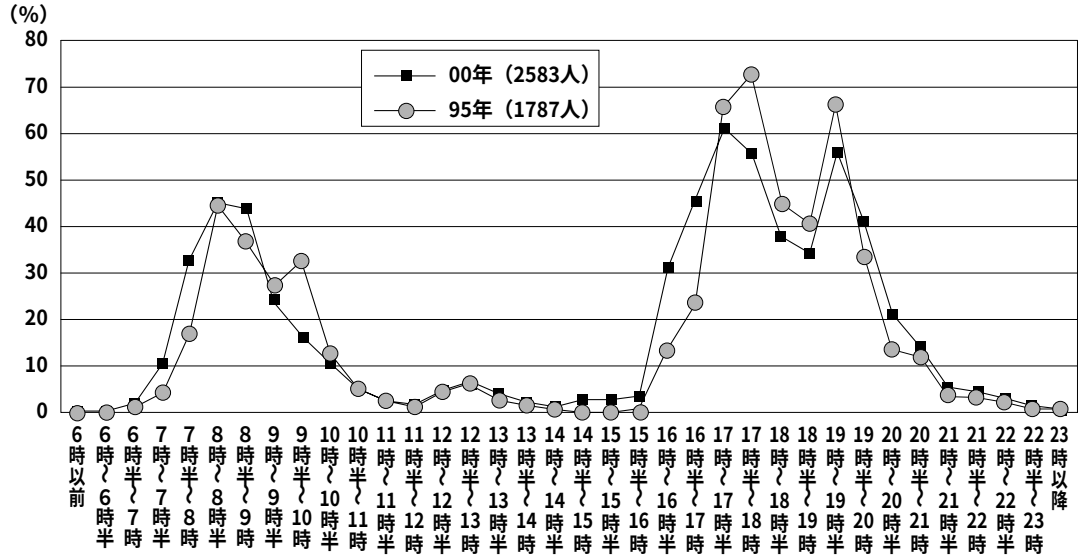
- 未就園児は、幼稚園・保育園児に比べて朝の視聴のピークが１時間ほど遅く（「８時半」～「９時」）、長い（２割以上が「７時半」～「10時」）。また、昼食時間に合わせてか再び小さな山ができる。夕方の視聴時間帯は、幼稚園・保育園児よりも早く、最も視聴率が高い。夜の視聴は他の子どもと比較してそれほど多くはないが、１割弱の子どもは22時頃まで視聴しており、幼稚園児よりも遅い。
- 幼稚園児は、登園に合わせて朝の視聴時間帯が未就園児より早く短い。また、夕方から夜にかけて視聴が集中する。しかし幼稚園の生活に合わせて視聴終了時間は最も早い。
- 保育園児の場合は、朝の時間帯は幼稚園児と同様である。夕方以降では、帰宅時間が遅いため、視聴時間の山が他の子どもより後ろにずれており、最も遅い時間までテレビを視聴していることがわかる。

表１－６　１日のテレビ視聴時間（95年との比較）

（平均時間）

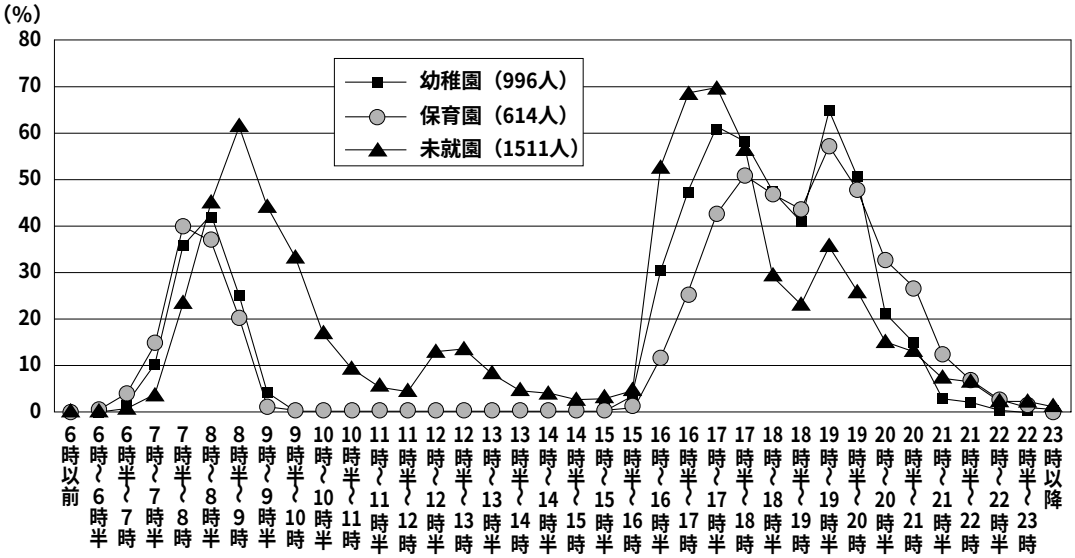
	95年	00年
1歳	3時間11分（125人）	3時間５分（290人）
2歳	3時間５分（441人）	3時間20分（734人）
3歳	3時間10分（302人）	3時間18分（393人）
4歳	2時間58分（497人）	2時間46分（348人）
5歳	2時間41分（216人）	2時間58分（365人）
6歳	2時間38分（187人）	2時間58分（378人）

図１－29　テレビ視聴時間帯（95年との比較）



＊複数回答

図１－30　テレビ視聴時間帯×就園状況（全体）



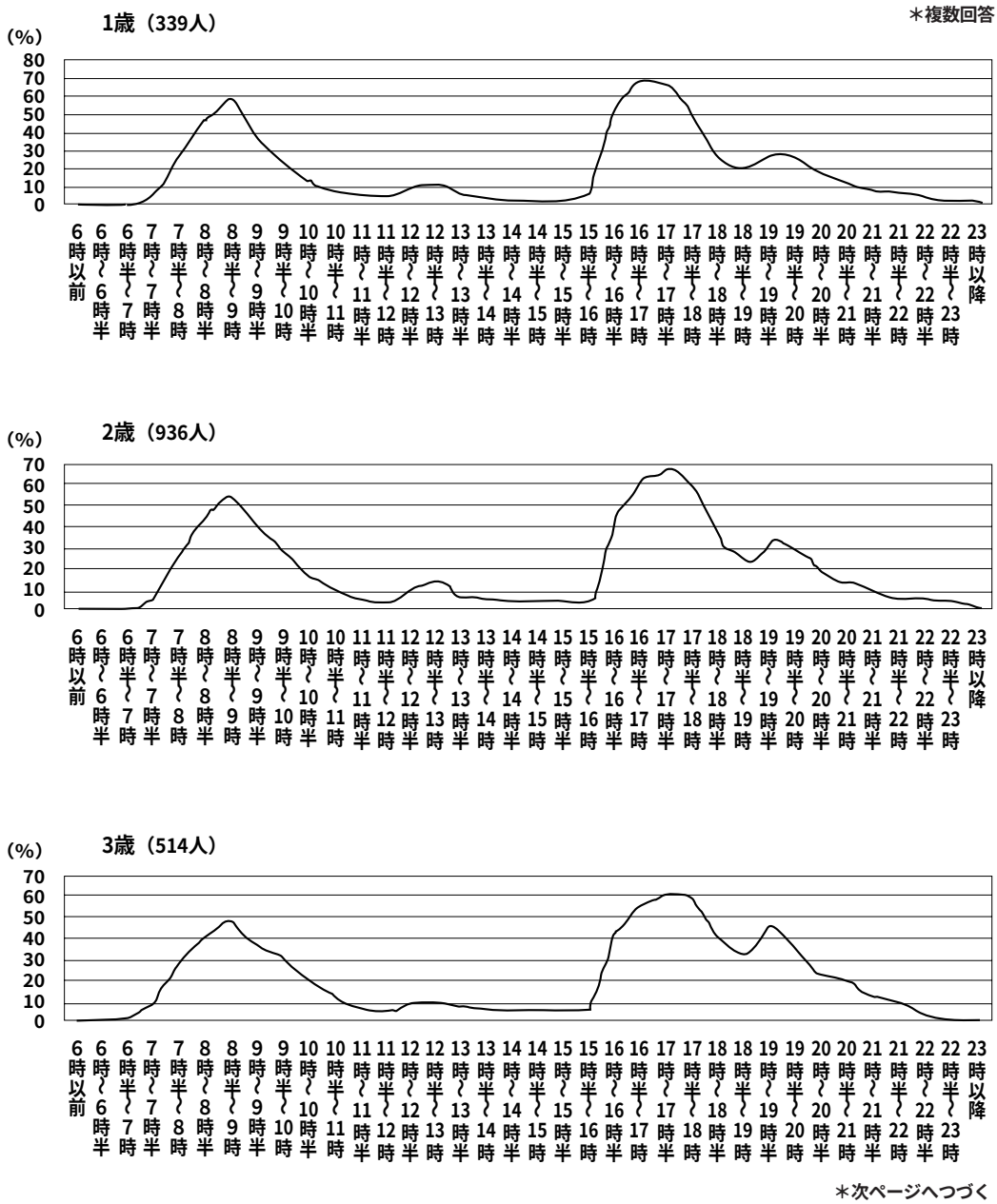
＊複数回答

年齢別視聴時間帯（図１－31）

図１－31は、今回調査の全体について１日の視聴時間帯を年齢別に比較したものである。これを見ると、１・２歳児では、朝と夕方に視聴が集中しており、夜の時間帯（19時以降）は、比較的なだらかである（３割前後）。また、昼の時間帯にも小さな山ができており、昼食をとりながら視聴する様子がうかがわれる。３歳児以上になると、朝と夕方に加えて、夜の時間帯に山ができる。年齢が上がるにつれて、この山は徐々に高くなり、夕食時間に

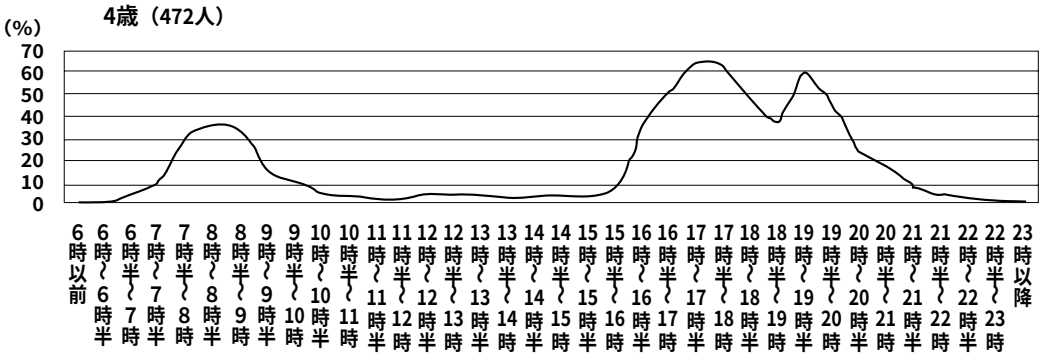
図１－31　テレビ視聴時間帯×年齢（全体）

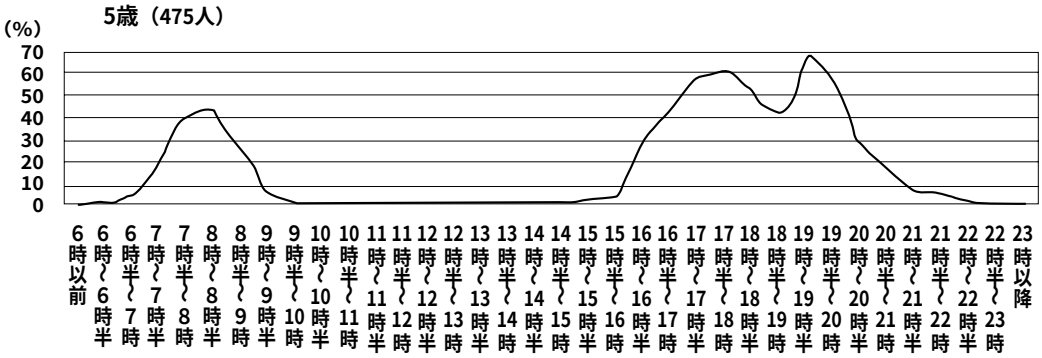
＊複数回答

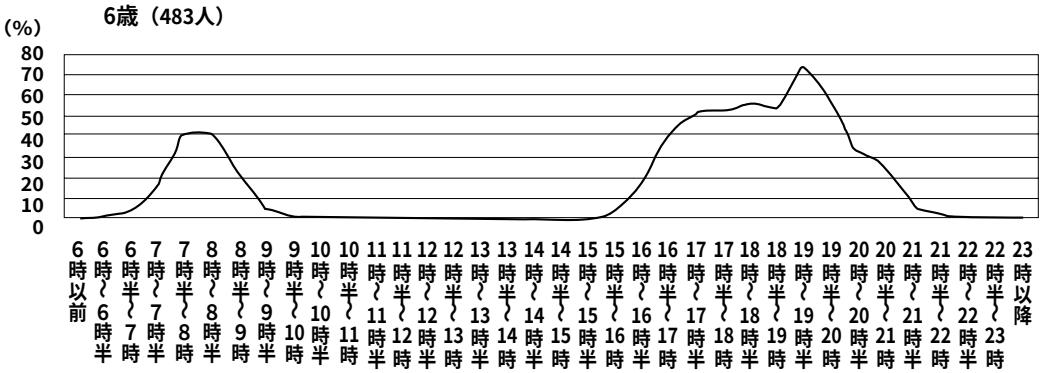


＊次ページへつづく

「ながら視聴」が増えていく様子が見られる。４歳児以上になると、幼稚園の生活スタイルに合わせてか昼の山がなくなり、朝も１～３歳児に比べて低くなる。一方、夕方から夜にかけての視聴に集中し、６歳児では夜の視聴率が７割と他の年齢に比べて最も高くなっている。しかし、終了時間は比較的早く、夜遅くまで視聴が続くのは、２・３歳児である。４歳児以上では就寝時間で見られたように、やはり幼稚園の生活スタイルに合わせてテレビの視聴時間も制限されていることがうかがえる。





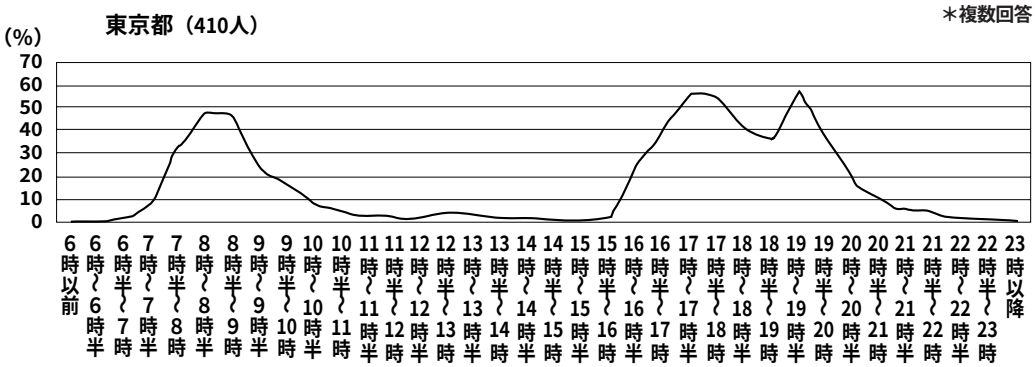


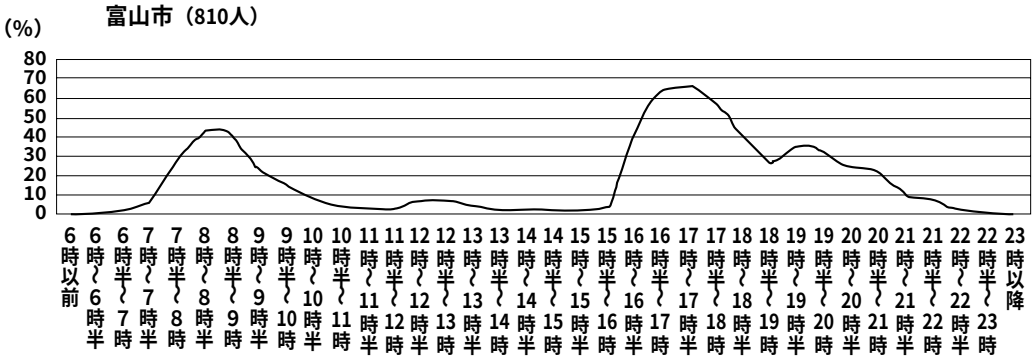
地域差（図１－32）

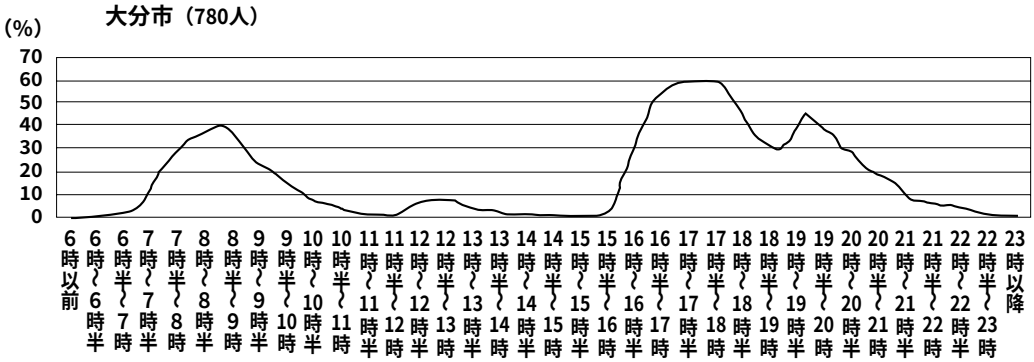
図１－32は、今回調査の全体数値について１日のテレビ視聴時間帯を地域別（東京都・富山市・大分市）に見たものである。朝の視聴時間帯はどの地域も同様で、違いは見られない。夕方から夜にかけての時間帯では、東京都、大分市では夕食時間をはさんで、夕方と夜に２つの山ができるが、富山市の場合、夜の山があまり見られず、比較的早くテレビ視聴を終了していることが特徴である。

図１－32　テレビ視聴時間帯×地域（全体）

＊複数回答



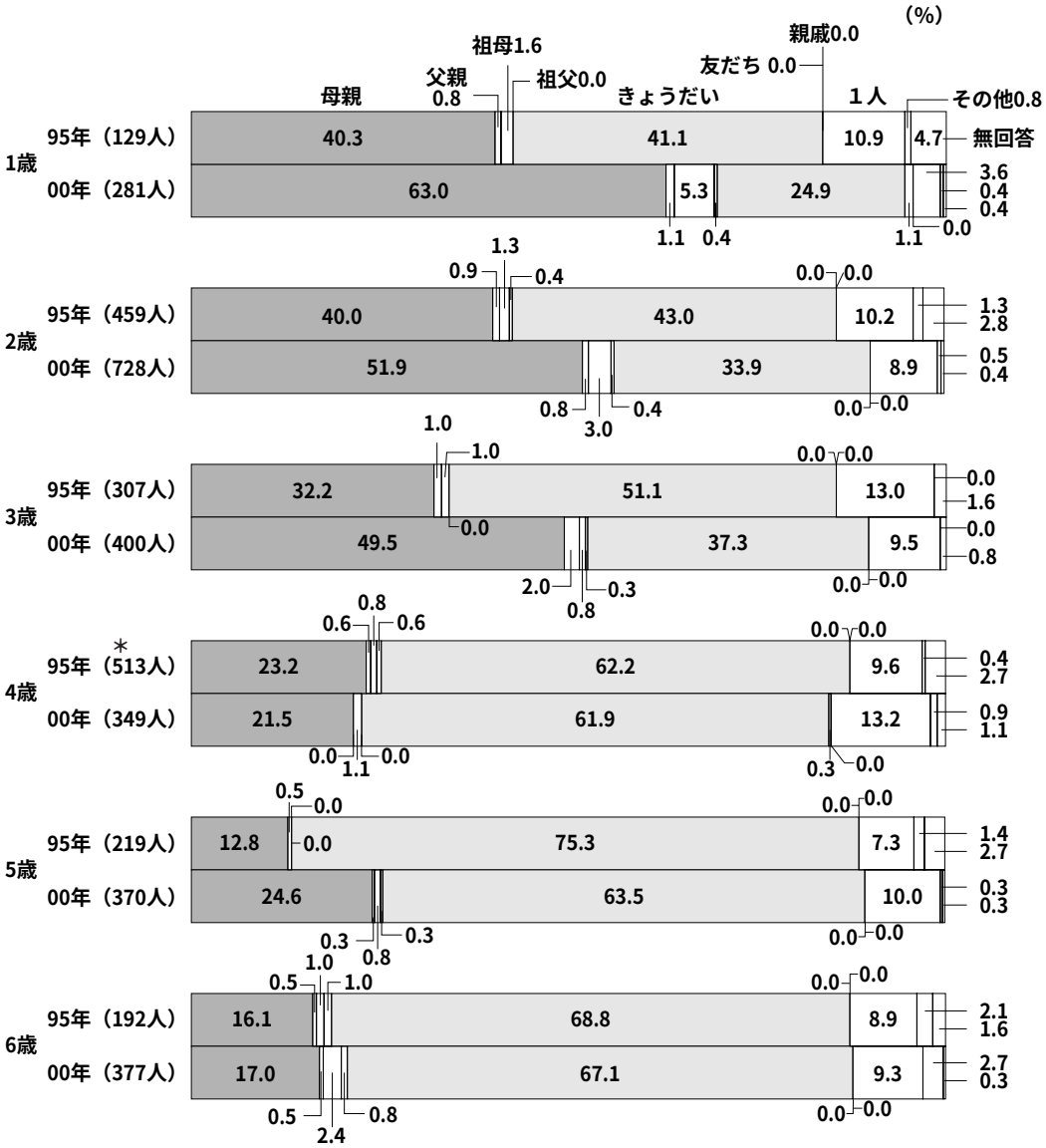




誰と一緒にテレビを見ているか（図１－33）

図１－33は、主にテレビを一緒に見ている人を年齢別にたずねた結果の前回との比較である。これを見ると、ほとんどの年齢で母親と一緒に見る割合が増加している。一方、きょうだいと一緒に見る割合は減少の傾向にある。今回の調査対象者は、きょうだいのいる割合が前回に比べて11.2%減少していることも影響していると考えられる。今回の数値を見ると、１～３歳児では母親と一緒にテレビを見る割合が高いが、４歳児以上になると、きょうだいと一緒に見る割合の方が多くなる。

図１－33　誰と一緒にテレビを見るか×年齢（95年との比較）



＊重みづけしたデータを用いているため、P.7　４歳児のサンプル数と異なる。

ビデオとのかかわり

ビデオ視聴の頻度・時間（図１－34・35）

図１－34は、ビデオの視聴頻度についてたずねた結果の前回との比較である。前回と比較して、ビデオを「ほとんど毎日見ている」割合が5.6ポイント増加しており、ビデオの活用頻度は増えている。これを年齢別に前回と比較したのが図１－35である。これを見ると、１～３歳児の方が４～６歳児よりも「ほとんど毎日見ている」割合が高く、ビデオを頻繁に活用していることがわかる。また、前回と比較すると、すべての年齢で「ほとんど毎日見ている」割合は増加しているが、１・２歳児は約８～９ポイント、３歳児以上では、約４～6ポイントの増加となっており、１・２歳児のビデオ活用がより増えていることがわかる。

年齢別ビデオ視聴時間（図１－36）

図１－36は、今回調査の全体数値について１日のビデオ視聴時間を年齢別に見たものである。全体的に見て、ビデオの視聴時間は30分～３時間以上と幅が広く、子どもによりばらつきがある。年齢別に見ると、４歳児以上の７割は視聴時間が１時間以内であるのに対し、３歳児以下では６割台にとどまり、１時間以上（主に１～３時間）の視聴が３割前後を占めている。視聴の頻度と同様に、時間の長さで見ても、より低年齢でビデオがよく活用されていることがうかがえる。

図１－34　ビデオ視聴頻度（95年との比較）

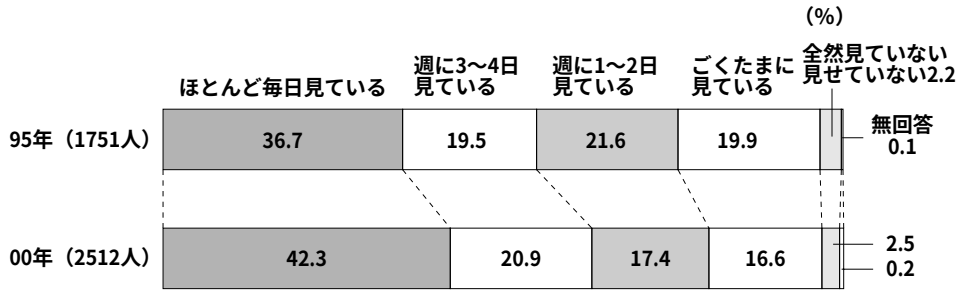
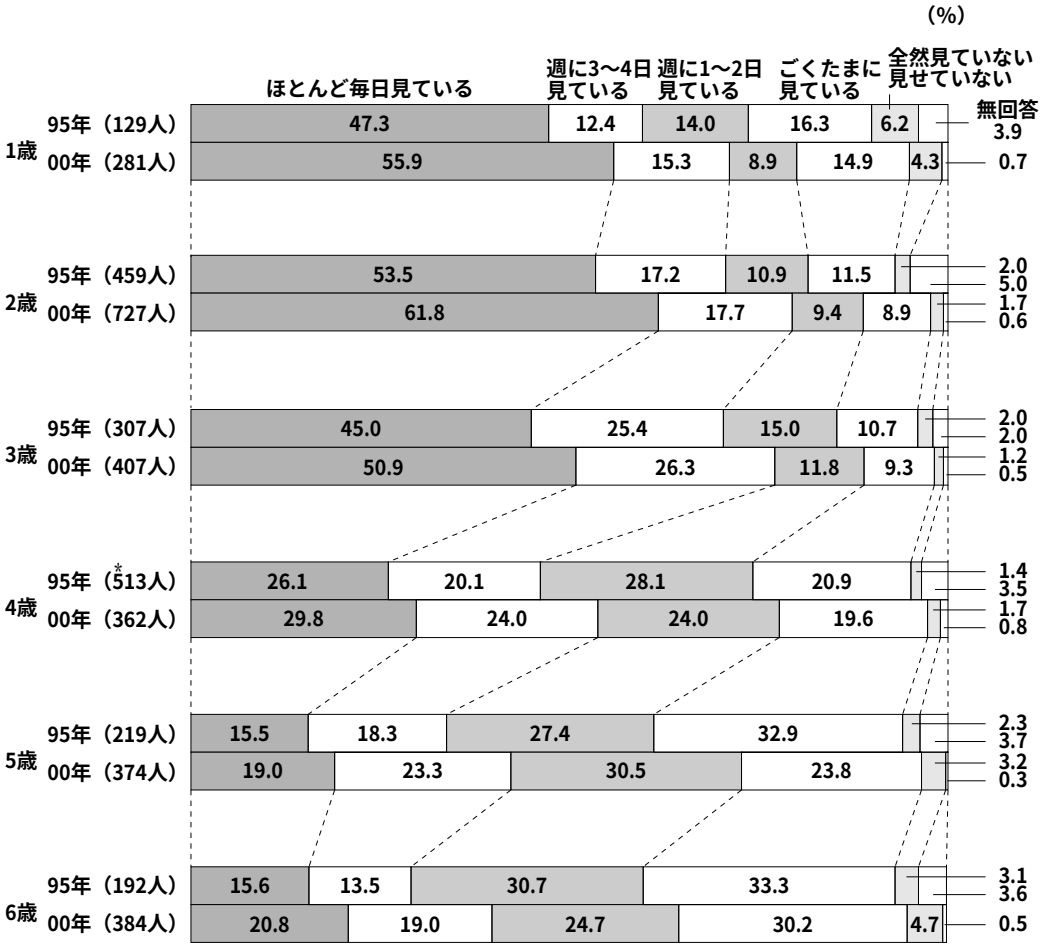
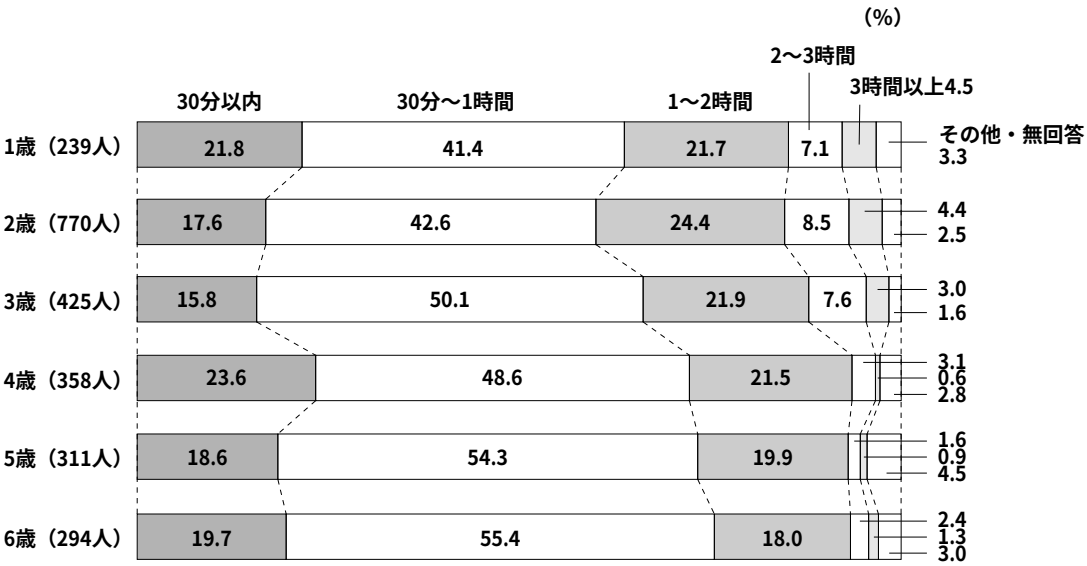


図１－35　ビデオ視聴頻度×年齢（95年との比較）



＊重みづけしたデータを用いているため、P.7　４歳児のサンプル数と異なる。

図１－36　ビデオ視聴時間×年齢（全体）



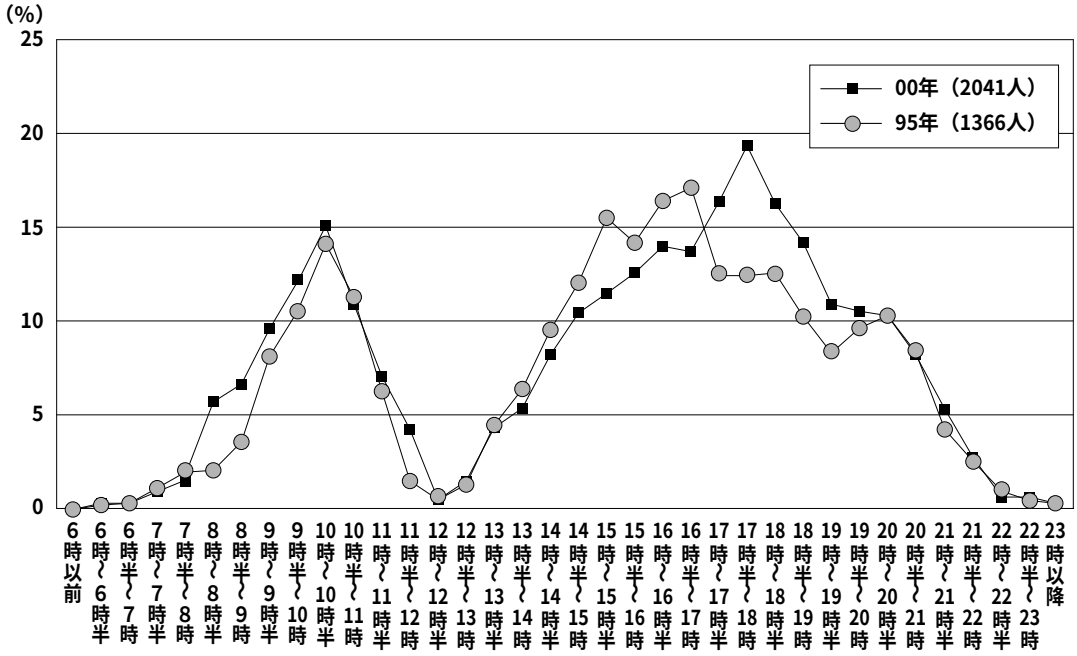
1日のビデオ視聴時間帯（図１－37・38）

では、1日の中でどのような時間帯にビデオを活用しているのだろうか。

図１－37は、１日のビデオ視聴時間帯を前回と比較したものである。テレビと同様、１日のうちで、視聴時間の山は朝と、夕方から夜の２つに分かれる。前回と比較すると、夕方から夜の視聴率が増加している。特にピークの「17時半～18時」では、視聴率が6.1ポイント増加している。

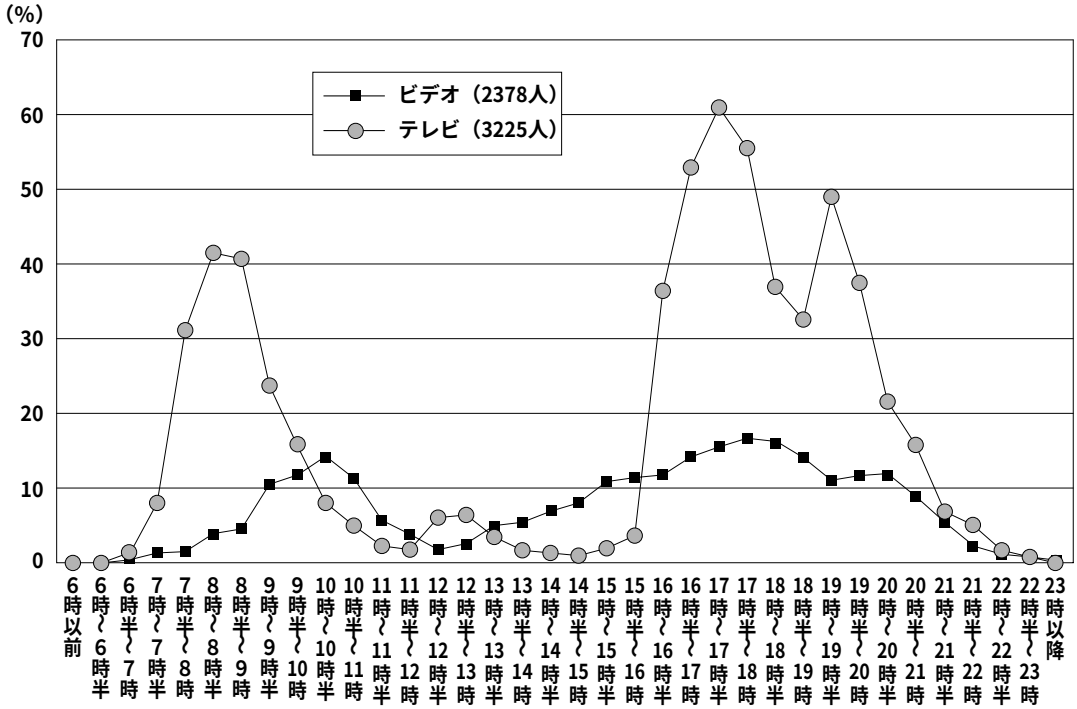
図１－38は、今回調査の全体数値について１日のビデオ視聴時間帯をテレビと比較したものである。テレビ視聴は限られた時間に集中し、山が高い。それに対して、ビデオ視聴はなだらかな曲線を描く。朝のビデオ視聴の山は、テレビ視聴の山よりも少し後ろにずれ込んでいる。前述したように、テレビの視聴時間帯は、幼児（子ども）向け番組の放送時間の影響を受けていると思われるため、朝の幼児向け番組が終わってから、引き続きテレビの前でビデオを視聴する子どもの様子が推測できる。夜の場合、テレビ視聴とビデオ視聴の山はほとんど一致している。これは就寝時間があるため、時間をずらせず、テレビかビデオのどちらかを選択して視聴しているものと考えられる。

図１－37　ビデオ視聴時間帯（95年との比較）



＊複数回答

図１－38　テレビ・ビデオの視聴時間帯（全体）



＊複数回答

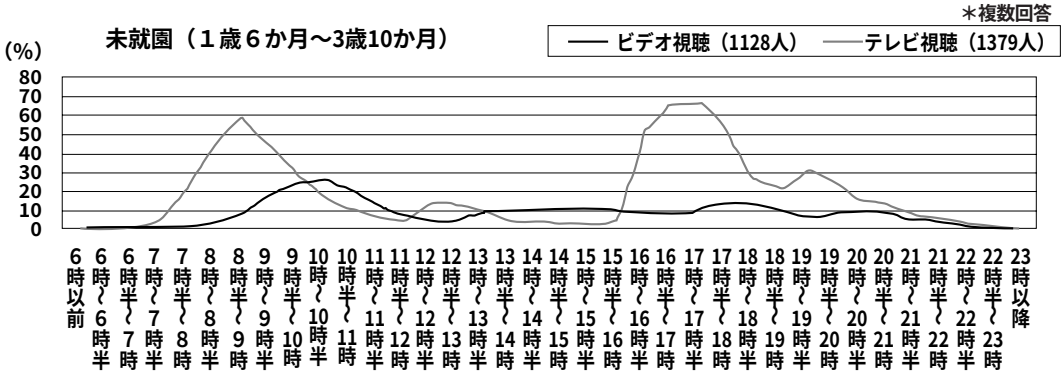
就園状況・年齢別視聴時間帯（図１－39）

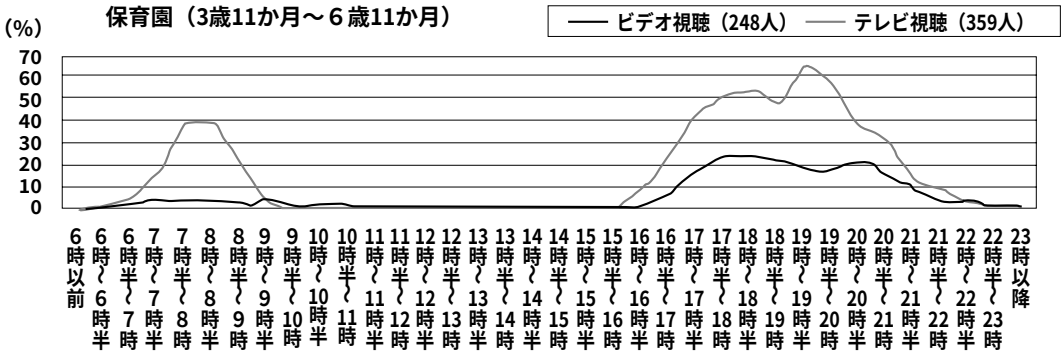
次に、生活スタイルの違いによるテレビ・ビデオ視聴の差を見てみたい。図１－39は、今回の数値について子どもを年齢・就園状況で４分類し、１日の視聴時間帯を見たものである（年齢区分の３歳11か月は、調査時点で３年保育の幼稚園に通園している年齢である）。

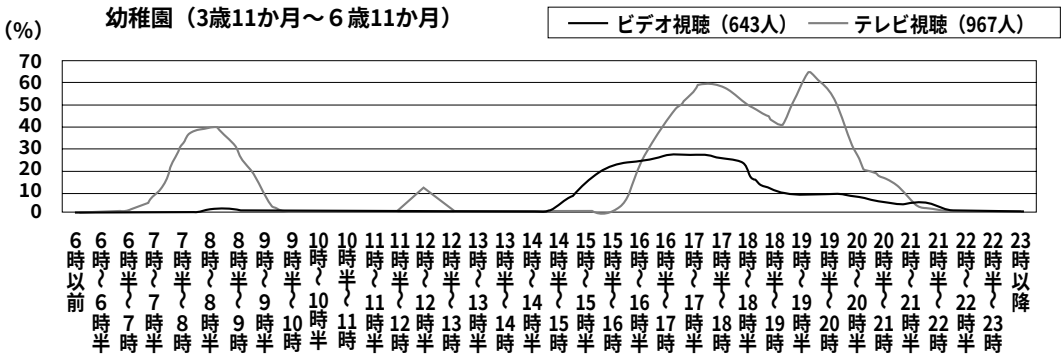
- 年少未就園児（１歳６か月～３歳10か月）の場合、ビデオの視聴率は最大でも30%以下で低いが、ほぼ１日中とぎれることなく視聴が続く。朝の山は、前述したようにテレビ視聴の山より少し後ろにずれていることから、自宅にいる年少未就園児の約２～３割は、朝７時すぎから夜11時くらいまでテレビ・ビデオを見て過ごす様子がうかがえる。テレビ視聴は限られた時間に集中するが、視聴率は最高で７割弱である。
- 年少保育園児（１歳６か月～３歳10か月）の場合、ビデオの視聴は夕方から夜にかけてが多い。特に「18時半～19時」の時間帯に視聴率が約４割となり、他の子どもと比べて最も高い数値となっている。この時間帯は、子どもの夕食時間のピークと重なっていることから、好きなビデオを見ながら夕食をとる子どもが多いと思われる。
- 年長保育園児（３歳11か月～６歳11か月）の場合は、全体の傾向が３歳10か月以下の年少保育園児とほぼ似ているが、よりテレビの視聴率が高くなる。その分、ビデオの視聴率が下がり、山はなだらかになる。テレビ視聴のピークは「19時～19時半」で、その後徐々に下がり、21時半頃に１割を切るが、23時までわずかながら視聴が続く。
- 幼稚園児（３歳11か月～６歳11か月）の場合は、夕方のビデオ視聴の山が15時頃（約２割）から始まる。ピークは「17時～17時半」（約３割弱）で、その後、18時半頃には１割程度に落ち着く。幼稚園児は保育園児と比べて帰宅時間が比較的早いことから、ビデオ視聴も早い時間から始まり、19時以降はテレビ視聴に切りかえる様子がうかがえる。視聴終了時間（テレビ・ビデオともに）は21時頃に１割を切る。他の子どもと比べて最も終了時間が早い。これは、前述した就寝時間と傾向が一致しており、幼稚園児の生活スタイルの特徴であると思われる。

図１－39　テレビ・ビデオの視聴時間帯×就園状況・年齢（全体）

＊複数回答







誰とビデオを見ているか（図１－40）

図１－40は、ビデオを主に一緒に見る人についてたずねた結果の年齢別（１・３・６歳児）前回との比較である。図は省略したが、全体値を見ると、母親（今回31.6％＞前回22.0％）が増加し、きょうだい（38.8％＜44.6％）、１人（24.7％＜28.2％）が減少している。

年齢別に見ると、前回と比べて１歳児では、母親と見る割合が18.6ポイント増加し、きょうだいと見る割合が14.1ポイント減少しており、約半数の子どもが母親と一緒にビデオを見ている。３歳児では、母親と一緒に見る割合が8.1ポイント増加し、きょうだいが9.3ポイント減少している。母親・きょうだい・１人で見る割合がどれも約３割程度と同数で並んでおり、３歳児頃から徐々に母親と一緒に見るパターンから離れる傾向がうかがえる。

６歳児では、母親と一緒に見る割合が5.3ポイント増加し、１人が5.0ポイント減少している。６歳児になると、きょうだいと一緒に見る割合が６割と圧倒的に多くなる。

見るビデオの種類（図１－41）

子どものビデオ活用のうち、市販と録画ではどちらが多く活用されているのだろうか。両者を対比させる形で、それぞれの活用状況をたずねた。図１－41は、市販・録画のどちらを見ているかをたずねた結果の年齢別の前回との比較である。

全体の傾向を見ると、市販のビデオ活用は１歳児が最も多く、年齢が上がるとともに録画ビデオの活用が増加し、５歳児以上でその割合は逆転する。

前回と比較すると、すべての年齢において市販ビデオの視聴率が増加している。最も増加したのは６歳児で16.3ポイント、最も少ないのは５歳児で7.2ポイントの差があった。

ビデオ操作（図１－42）

子どものビデオ操作について年齢・男女別にたずねた結果が図１－42である。ビデオの操作が「１人でできる」子どもは、３歳児で約６割、６歳児では約８割となる。男女別に見ると、すべての年齢で女子より男子の方が割合が多い。２歳児男子の場合、４割強が１人でビデオ操作ができるという結果になっている。

前回と比較して、ビデオ操作の割合に大きな変化は見られなかった。

図１－40　誰と一緒にビデオを見るか×年齢（95年との比較）

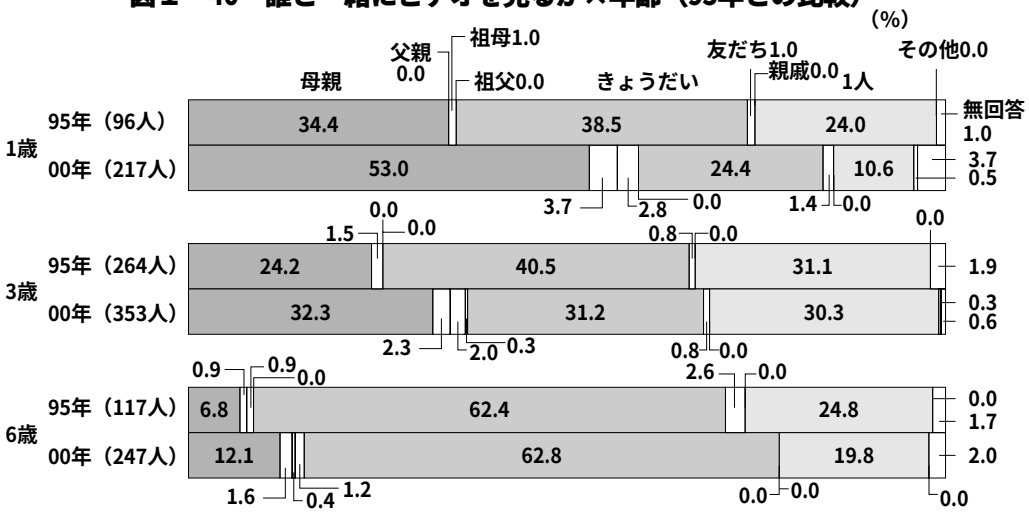


図１－41　市販と録画の活用状況×年齢（95年との比較）　(%)

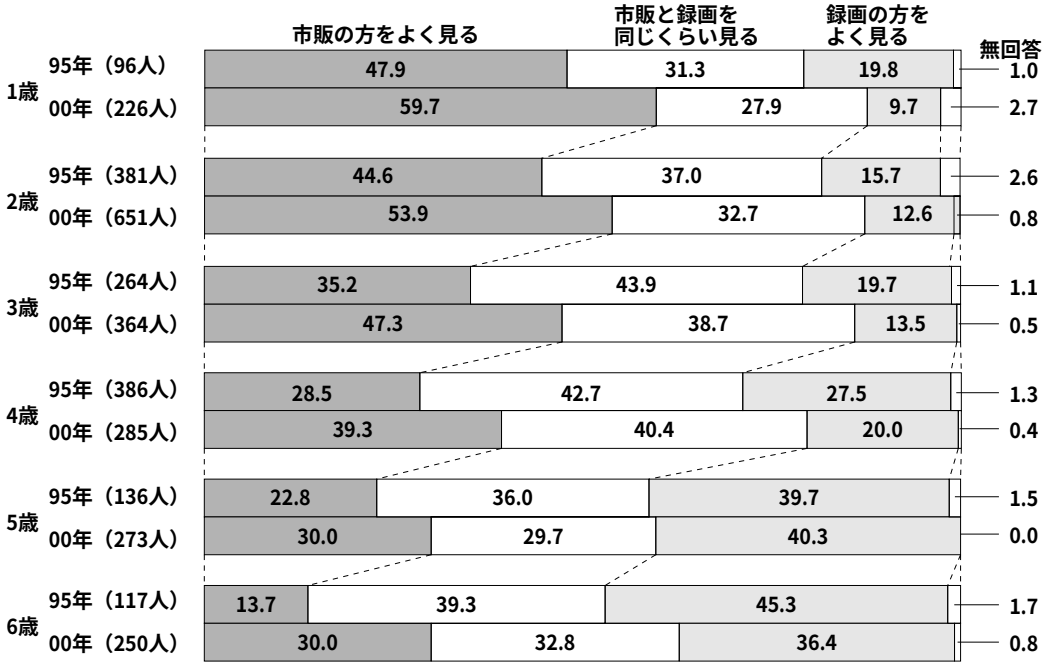
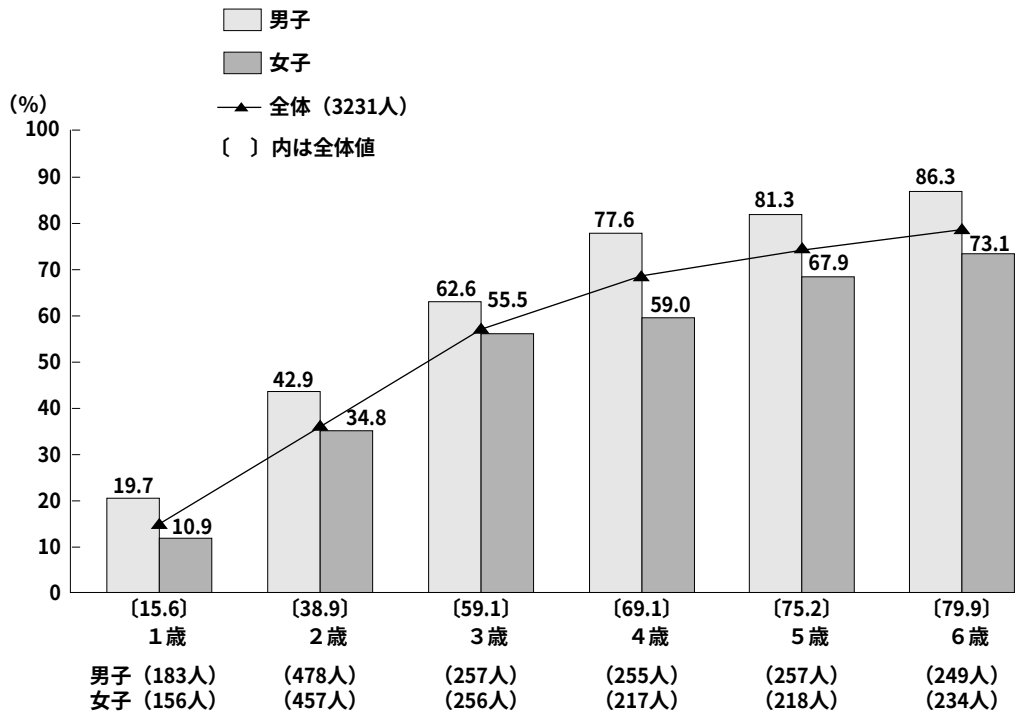


図１－42　ビデオの操作（「再生」を自分１人でできる）×年齢・性（全体）



家にあるもの

子どもたちはどのようなものに囲まれ、それらにどの程度接して生活しているのだろうか。家庭環境として、主に子ども向け読み物（ペーパーメディア）と電子メディアを中心とした家庭にあるもの11点をとりあげ、それらについての所有率、使用頻度、一緒に使う人についてたずねた。

前回との比較（図１－43）

まず、家にあるものについて前回と比較した結果が図１－43である。前回と比較して増加したものは、「パソコン」（30.3ポイント）、「CD」（10.3ポイント）であった。逆に減少したものは、「ワーク」（17.7ポイント）、「学習機器」（13.3ポイント）、「ワープロ」（6.6ポイント）、「図鑑」（6.0ポイント）だった。

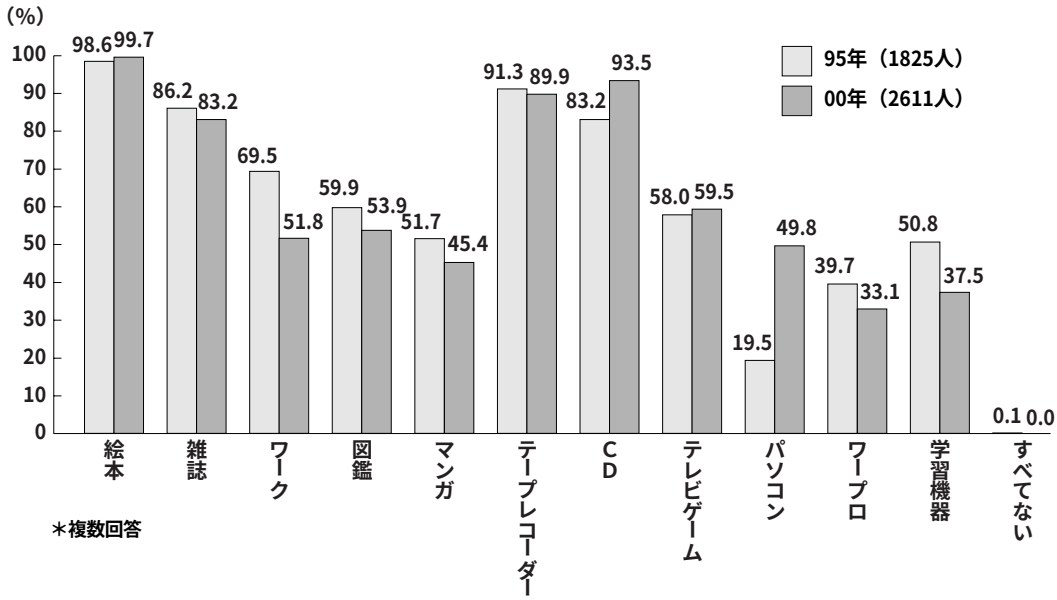
図は省略したが、子どもの年齢が上がるにしたがって所有率が上がるものは「ワーク」「図鑑」「マンガ」「テレビゲーム」などであり、「絵本」「雑誌」「テープレコーダー」「CD」などは年齢に関係なく所有率が８割を超えて一定している。

年齢別前回との比較（図１－44）

これら11点のうち、「ワーク」「図鑑」「パソコン」をとりあげ、年齢別に前回と比較したものが図１－44である。

- 「ワーク」の場合、前回と比較して、すべての年齢で減少傾向にあり、その差は年齢が低いほど大きい（１歳児で15.4ポイント差に対し６歳児で7.8ポイント）。ワークの所有率は、１・２歳児では約２～３割であるが、３歳児で５割、４歳児以上で7割を超え、年齢が上がるとともに関心が高くなると思われる。
- 「図鑑」も「ワーク」と同様の傾向にあり、前回と比較して、ほとんどの年齢で所有率は減少している。しかし「ワーク」とは逆に、年齢が上がるにつれて差が大きくなる（１歳児で5.7ポイント差に対して、６歳児で11.1ポイント差）。

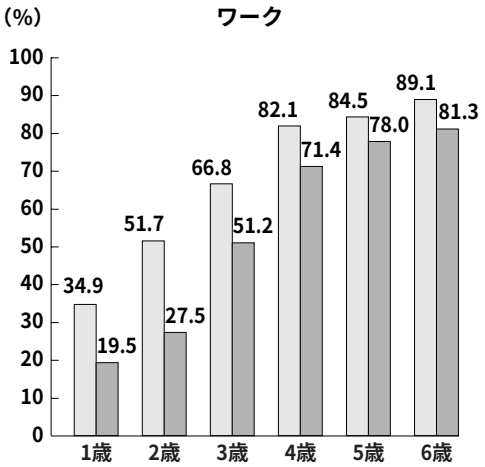
図１－43　家にあるもの（95年との比較）

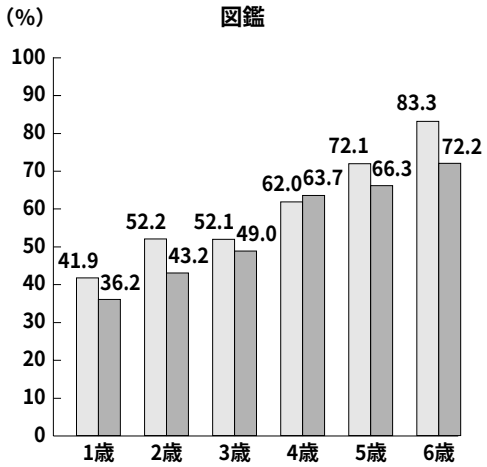


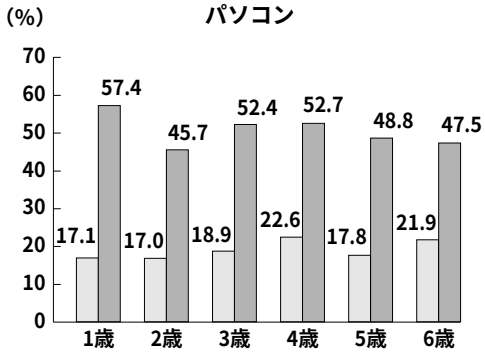
• 「パソコン」の場合は、前回と比較して、すべての年齢で増加している。最も差の大きいのは、１歳児で40.3ポイントの増加、最も差の小さいのは６歳児で25.6ポイントの増加である。「パソコン」の所有率は、子どもの年齢に関係なく、ほぼ45～57%前後である。むしろ父親の学歴との相関性の方が高い。

図１－44　家にあるもの×年齢（95年との比較）

95年　00年　＊複数回答







〔回答数〕

	95年	00年
1歳	129人	298人
2歳	459人	761人
3歳	307人	418人
4歳	513人	364人
5歳	219人	377人
6歳	192人	385人

使う頻度（表１－７、図１－45）

表１－７は、使用頻度をたずねた今回の全体数値である。「絵本」「雑誌」は、「ほとんど毎日」接している割合が高い（絵本55.4%、雑誌24.7%）。その他のものでは、「ごくたまに」接している割合が２割以上であるものが多く、「絵本」「雑誌」を除くと、それほど頻繁には使用されていないようである。

また、使用頻度を前回と比較したのが図１－45である。「ほとんど毎日」と「週に３～４日」接する割合を合わせたものであるが、前回と比較して増加したもの（5ポイント以上、以下同）は、１つも見られなかった。逆に減少したものは、「ワーク」（8.9ポイント）、「テープレコーダー」（6.3ポイント）、「雑誌」（5.7ポイント）であった。「ワーク」については、所有率でも10ポイント以上減少していることも影響していると考えられる。

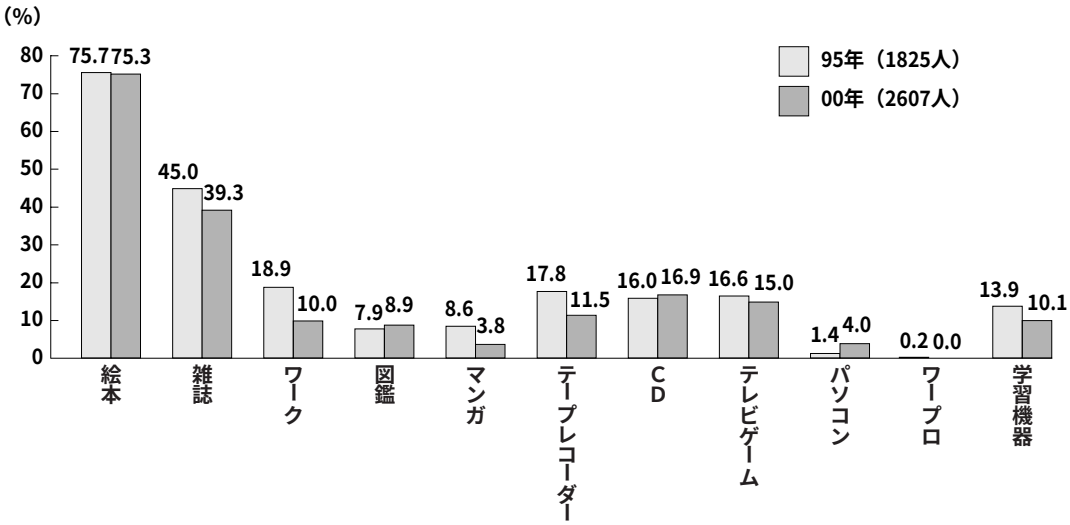
表１－７　使う頻度（全体）

(%)

	ほとんど毎日	週に3～4日	週に1～2日	ごくたまに	全然さわらない使わない	使わせない	家にない
絵本（3268人）	55.4	18.8	11.9	12.7	0.6	0.0	0.2
雑誌（3265人）	24.7	14.7	14.6	26.2	2.5	0.6	10.5
ワーク（3264人）	3.4	5.7	12.4	25.7	5.3	1.2	33.3
図鑑（3263人）	4.0	4.8	8.1	30.2	7.3	0.6	32.9
マンガ（3265人）	2.2	2.0	3.5	18.1	18.6	6.2	34.9
テープレコーダー（3265人）	6.0	5.8	8.6	31.3	19.8	14.9	6.9
CD（3265人）	7.8	7.5	11.6	32.5	15.8	15.9	4.0
テレビゲーム（3266人）	8.9	5.5	6.0	15.8	9.4	13.3	29.9
パソコン（3265人）	1.2	2.3	4.8	14.2	6.1	18.1	38.4
ワープロ（3261人）	0.1	0.1	0.4	6.3	9.2	19.7	45.4
学習機器（3268人）	4.2	5.0	6.3	15.9	3.4	1.1	49.0

＊―― は2割を超えるもの

図１－45　使う頻度（ほとんど毎日＋週に３～４日）（95年との比較）

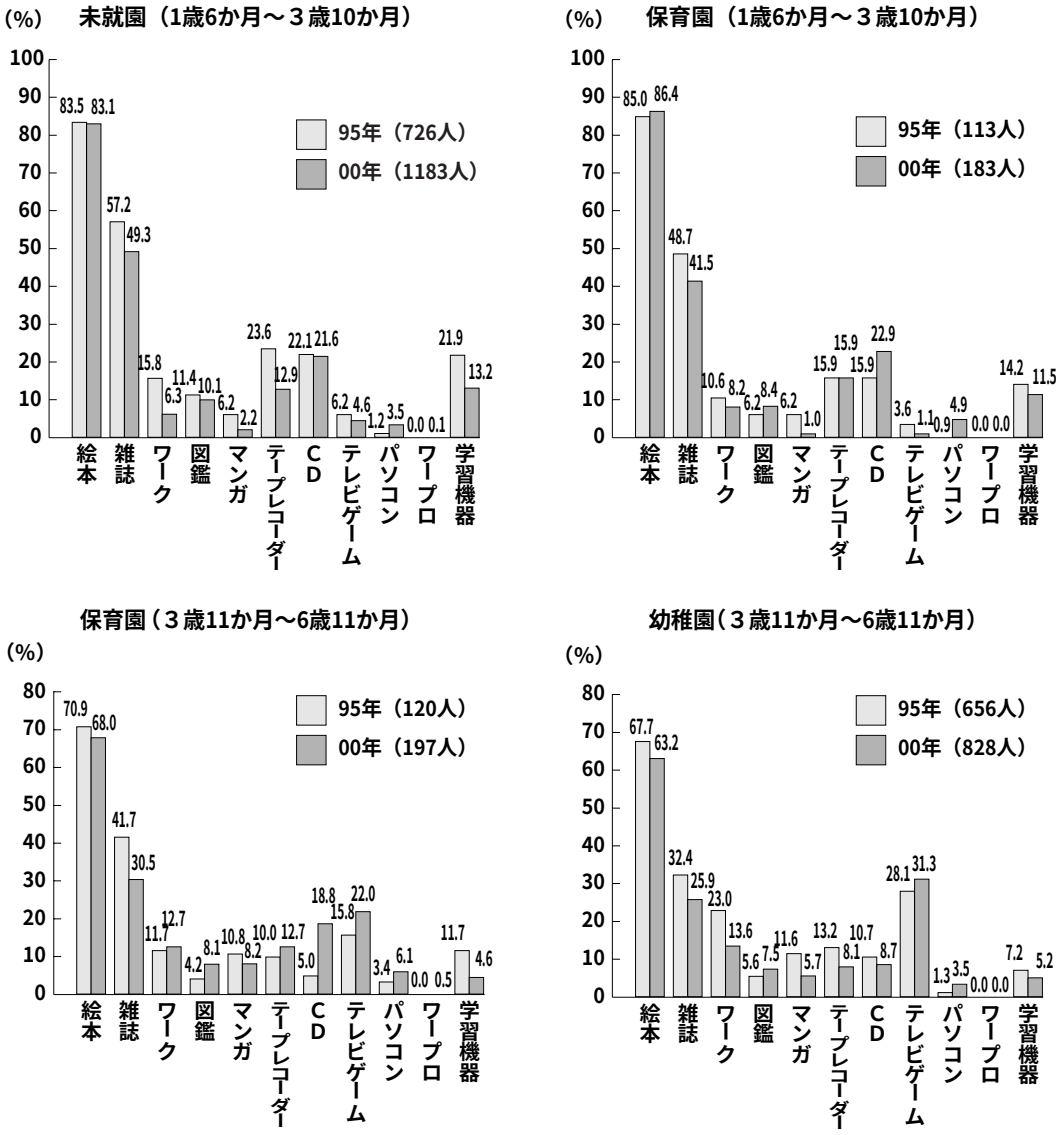


年齢・就園状況別使用頻度（図１－46）

図１－46は、年齢・就園状況別に使用頻度をたずねた結果の前回との比較である。

- まず、１歳６か月～３歳10か月の年少未就園児を見ると、前回と比較して使用頻度の５ポイント以上増加したものは見られなかった。減少しているもの（５ポイント以上、以下同）は、「テープレコーダー」（10.7ポイント）、「ワーク」（9.5ポイント）、「学習機器」（8.7ポイント）、「雑誌」（7.9ポイント）であった。使用頻度の高かった順は（今回の数値より）、「絵本」「雑誌」「ＣＤ」「学習機器」「テープレコーダー」であった。
- １歳６か月～３歳10か月の年少保育園児の場合、５ポイント以上増加したものは「ＣＤ」（7.0ポイント）のみであった。逆に、減少したのは「雑誌」（7.2ポイント）、「マンガ」（5.2ポイント）であった。使用頻度の高かったもの（今回）は、年少未就園児

図１－46　使用頻度（ほとんど毎日＋週に3～4日）×就園状況（95年との比較）



とほとんど同様である。

- ３歳11か月～６歳11か月の年長保育園児の場合、前回と比較して使用頻度が５ポイント以上増加したものは、「ＣＤ」（13.8ポイント）、「テレビゲーム」（6.2ポイント）であった。逆に減少したのは、「雑誌」（11.2ポイント）、「学習機器」（7.1ポイント）であった。使用頻度の高かった順（今回）は、「絵本」「雑誌」「テレビゲーム」「ＣＤ」であった。年齢が上がると「テレビゲーム」の使用率が増加する傾向にある。
- ３歳11か月～６歳11か月の幼稚園児の場合、前回と比較して使用頻度が５ポイント以上増加したものはなかった。減少したものは、「ワーク」（9.4ポイント）、「雑誌」（6.5ポイント）、「マンガ」（5.9ポイント）、「テープレコーダー」（5.1ポイント）であった。使用頻度が高かったもの（今回）は、年長保育園児とほとんど変わりないが、テレビゲームの使用率が年長保育園児に比べて9.3ポイント高くなっている（31.3%＞22.0%）。

家にあるものの使用頻度については、就園状況よりも、年齢による差が大きいようである。

誰と使うか（図１－47）

子どもは、家にあるものを誰と一緒に使っているのだろうか。主に一緒に使っている人について前回と比較したのが図１－47である（家にあるもの11点のうち、ペーパーメディアから２点、電子メディアから２点を取り上げた）。なお、ここで扱う数値は「家にない」を除いて分析しているため、基礎集計表の数値とは異なっていることをお断りしておく。

- 「絵本」の場合、前回と比較して５ポイント以上差の開いたものはなく、母親と一緒に使う割合が7割以上と、圧倒的に多かった。
- 「雑誌」の場合は、前回と比較して、母親が7.1ポイント増加している。母親と一緒に使用する割合は５割程度で、それ以外には1人で使う（27.3%）、きょうだいと一緒に使う（14.3%）割合が高い。
- 「テープレコーダー」の場合は、前回と比較して、母親と一緒に使う割合が12.1ポイント増加し、６割強が母親と一緒に使っている。「雑誌」と同様に、母親以外ではきょうだいで使う、1人で使うケースも１割見られる。
- 「テレビゲーム」の場合、前回と比較して、父親と一緒に使う割合が12.2ポイント増加している。「テレビゲーム」は、きょうだいと一緒に使う割合が46.0%と最も高く、その他では母親、1人で、父親と一緒に使う割合がそれぞれ１～２割である。

年齢別一緒に使う人（図１－48）

さらに今回の全体の結果を「雑誌」と「テレビゲーム」について年齢別に見たものが図１－48である（「家にない」を除いた数値）。

- 「雑誌」の場合、１歳児では66.5%が母親と一緒に使っているが、徐々に母親の割合が減少し、５歳児で1人で使う割合とほぼ並ぶ。６歳児になると、母親と一緒に使う割合は２割になる。一方、1人で使う割合は、１歳児で１割強であるが、年齢が上がるとともに上昇し、6歳で約５割弱が1人で使用するようになる。その他には、きょうだいと一緒に使う割合が５・６歳児で２割強見られる。
- 「テレビゲーム」の場合、きょうだいと一緒に使う割合が最も高い。１～６歳児まですべての年齢において、45～54%程度である。出生順位別では、第２子以降できょうだいと一緒に使う割合が高くなっている。その他では、父親と一緒に使う割合が１～３歳児で３割程度と、他のものに比較して高い数値である。４～６歳児になると、きょうだい、父親の割合が若干減り、1人で使う、友だちと使う割合が年齢が上がるとともに高くなる。

図１－47　誰と使うか（「家にない」を除いた数値）（95年との比較）

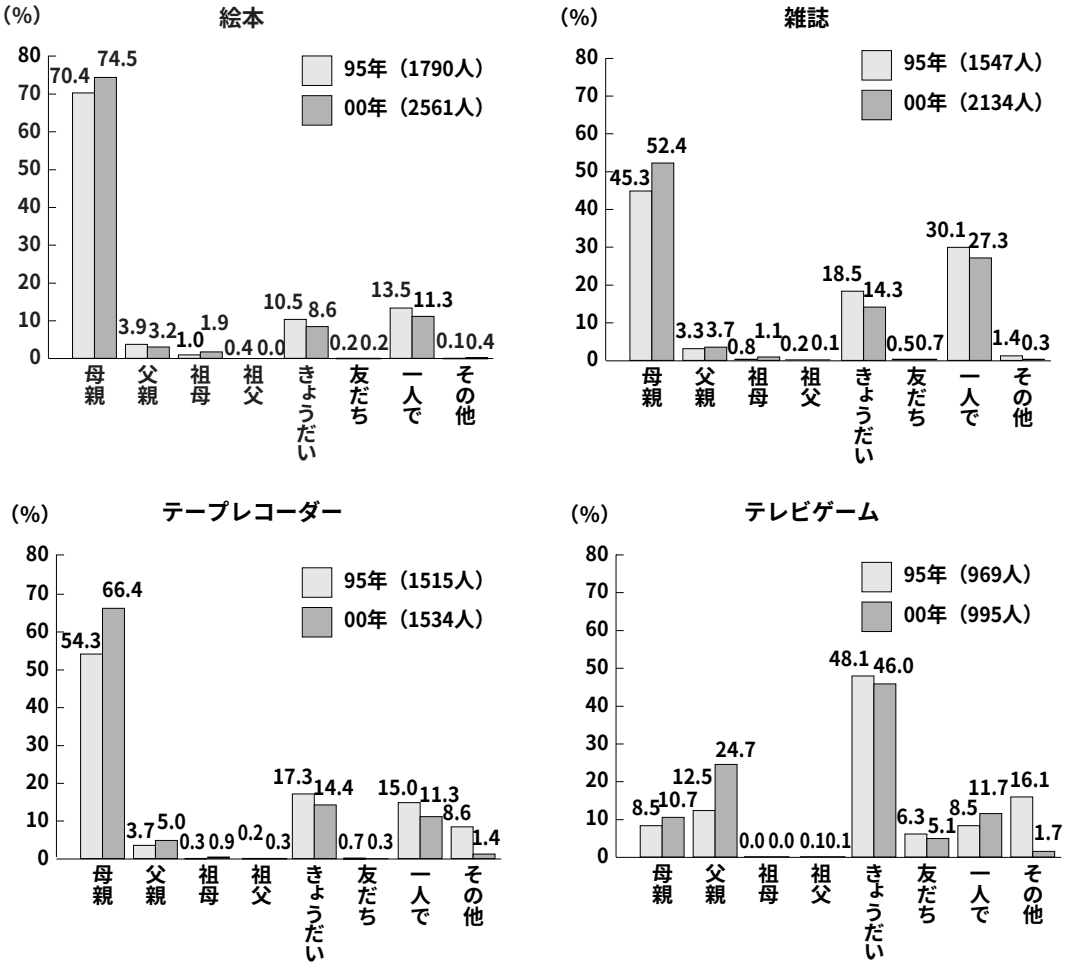
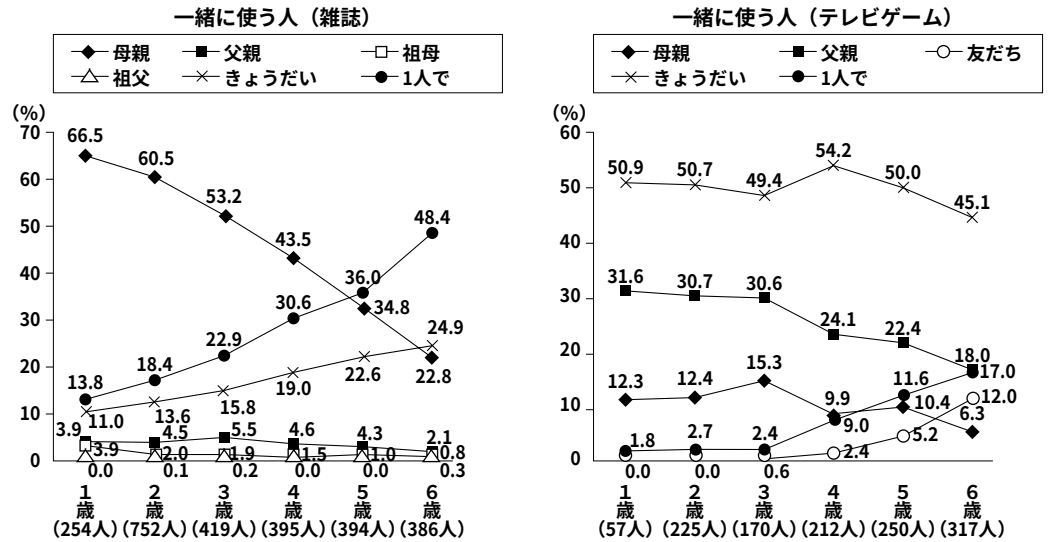


図１－48　一緒に使う人（「家にない」を除いた数値）×年齢（全体）



4 遊びについて

よくする遊びの種類（図１－49）

子どもがよくする遊びについて、複数回答でたずねた結果を前回と比較したのが図１－49である。前回より増加した遊び（５ポイント以上）は、「石ころや木の枝など自然のものを使った遊び」(7.9ポイント)、「ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び」(6.7ポイント）であった。逆に減少した遊びは、「ジグソーパズル」(6.4ポイント）であった。

図に出してはいないが、今回の全体数値を見ても、「石ころや木の枝など自然のものを使った遊び」は、地域別に偏った傾向は見られない。むしろ東京都、神奈川県など首都圏の数値が高く、富山市、大分市は低い傾向にある。富山市の場合、調査時期が２月のため気候の影響があると考えられるが、「自然のものを使った遊び」は、地域よりも幼稚園・保育園などの生活環境により大きく影響されているのではなかろうか。

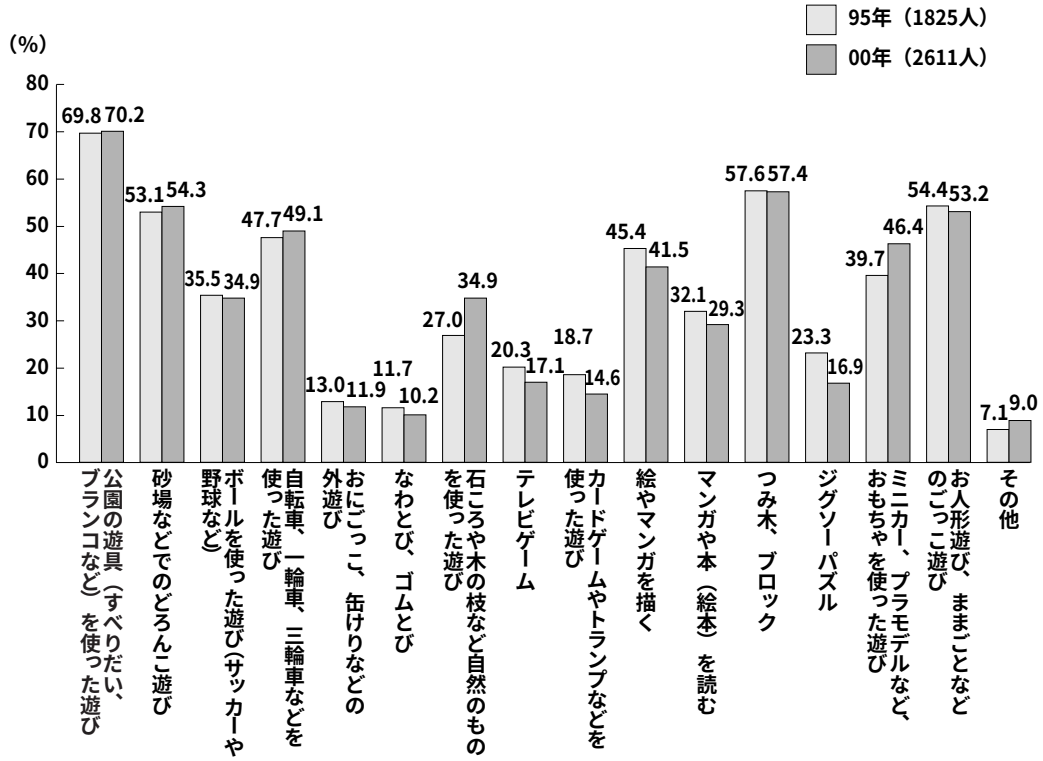
年齢･男女別よくする遊び（表１－８）

表１－８は、遊びの種類を年齢・男女別に前回と比較してみたものである。前回と比べて、遊びの種類に大きな変化は見られない。

年齢別では、１～６歳児を通して「公園の遊具を使った遊び」の順位が高く、年齢が上がるにつれて「テレビゲーム」や「絵を描く」など室内遊びの順位が高くなる。

男女別では、男子は１～６歳児を通して「おもちゃを使った遊び」が１位であるが、前回と比較して１～３歳児で数値が5.0ポイント増加している。一方、女子では、４～６歳児で５年前より「泥遊び」が減少し（9.0ポイント)、「公園遊具」が増加している傾向にある。

図１－49　よくする遊びの種類（95年との比較）



＊複数回答

表１－８　よくする遊び×年齢・性（95年との比較）

①男子　　(%)

	1～3歳				4～6歳			
	95年（438人）		00年（728人）		95年（437人）		00年（617人）	
1位	おもちゃ	79.5	おもちゃ	84.5	おもちゃ	65.0	おもちゃ	63.2
2位	公園遊具	79.0	公園遊具	74.5	つみ木・ブロック	60.0	公園遊具	62.9
3位	つみ木・ブロック	70.5	つみ木・ブロック	69.5	公園遊具	58.4	自転車	61.8
4位	泥遊び	63.5	泥遊び	58.8	自転車	52.6	つみ木・ブロック	53.2
5位	ボール遊び	49.3	ボール遊び	46.8	ボール遊び	52.2	テレビゲーム	47.6
6位	自転車	47.3	自転車	45.1	テレビゲーム	46.7	泥遊び	45.7

②女子

	1～3歳				4～6歳			
	95年（457人）		00年（745人）		95年（485人）		00年（509人）	
1位	公園遊具	81.2	ごっこ遊び	80.5	ごっこ遊び	86.8	ごっこ遊び	86.1
2位	ごっこ遊び	81.0	公園遊具	78.4	絵を描く	70.3	絵を描く	69.5
3位	つみ木・ブロック	68.7	つみ木・ブロック	64.3	自転車	48.7	公園遊具	60.9
4位	泥遊び	62.4	泥遊び	63.6	泥遊び	41.4	自転車	49.5
5位	絵を描く	46.8	絵を描く	46.8	本を読む	33.8	つみ木・ブロック	34.4
6位	自転車	43.1	自転車	42.1	つみ木・ブロック	33.8	泥遊び	32.4

＊複数回答

平日の遊び相手（図１－50・51）

平日の遊び相手は、母親、きょうだい、友だちの割合が高い。しかし前回と比較すると（図１－50）、きょうだい、友だちと遊ぶ割合が減少し、母親、父親、祖母、祖父、親戚と１人で遊ぶ割合が増加している。今回と前回の調査対象者の属性を比較すると、今回はきょうだいのいる割合が減少している（前回77.2%、今回66.0%）ことから、前回の結果に比べて、きょうだい以外の家族と遊ぶ割合が増加しているものと考えられる。

平日の遊び相手を年齢別にたずねたものが図１－51である。

- 「母親と一緒に遊ぶ」割合は、前回と比較して、すべての年齢で増加している。特に、４～６歳児で増加の割合は大きく、最も差のあるのは５歳児で23.8ポイントの増加であった。６歳児でも約４割の子どもが平日、主に母親と一緒に遊んでいるようである。
- 「父親と一緒に遊ぶ」割合はほとんどの年齢で増加している。父親と遊ぶ割合は、１歳児が最も増加しており、11.3ポイントの増加であった。１歳児で２割弱が平日父親と一緒に遊んでいる。
- 「１人で遊ぶ」割合も、すべての年齢で増加している。最も１人遊びの多いのは４歳児で、24.2%であった。最も少ない１歳児でも15.8%であり、年齢による差はあまり見られない。
- 「きょうだいと遊ぶ」割合は、４・６歳児で増加している。1～３歳児で減る割合が多く、最も差のある１歳児で、20.1ポイントの減少であった。
- 「友だちと遊ぶ」割合は、１～３歳児で増加し、４～６歳児で減少している。その結果、１～６歳児の差が縮んでいる。１～４歳児で4～５割台、5・６歳児で６割台である。今回の調査対象者は、前回と比較して幼稚園児が減少し、保育園児が増加している傾向にあることから、平日友だちと遊ぶ割合に影響を及ぼしていると考えられる。

図１－50　平日の遊び相手（95年との比較）

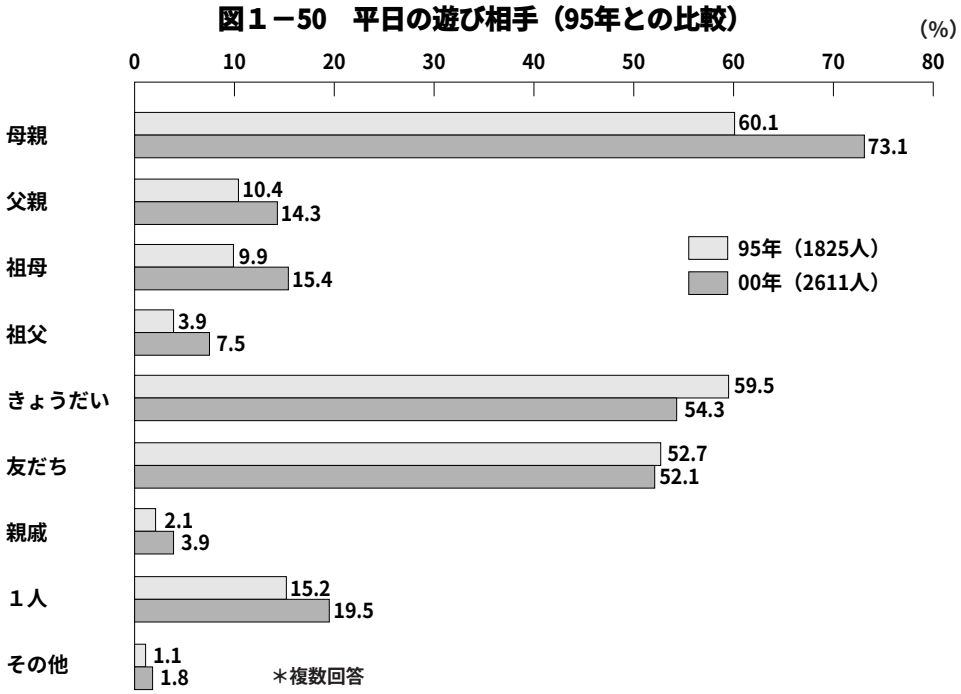
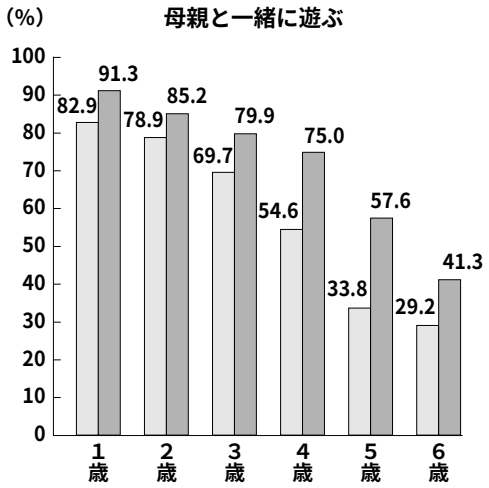
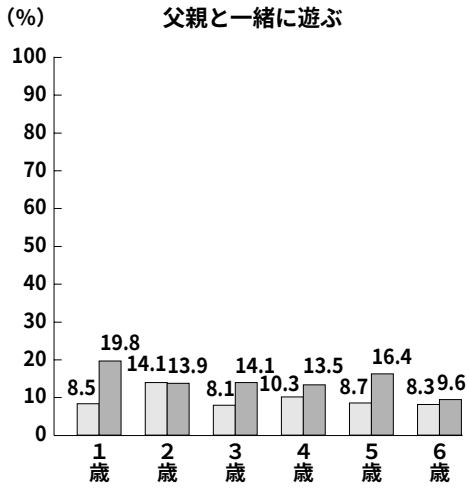
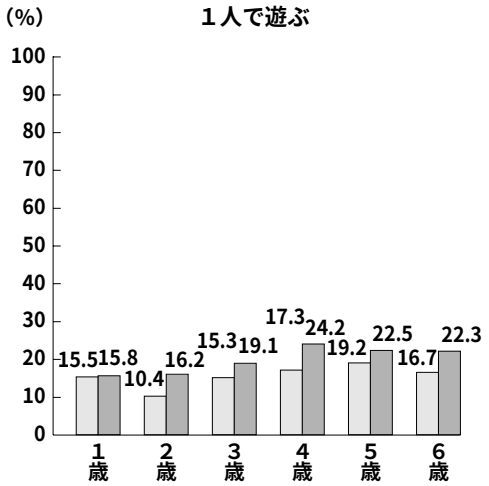


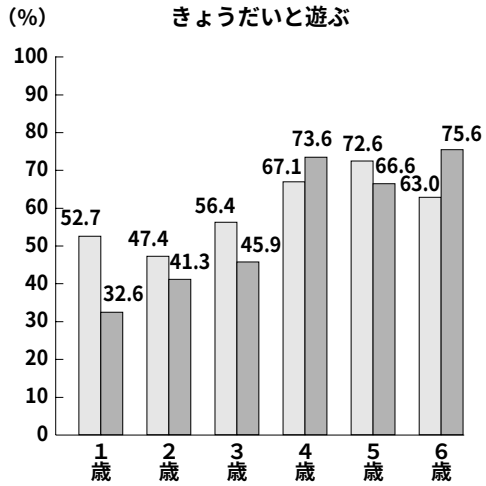
図１－51　平日一緒に遊ぶ人×年齢（95年との比較）

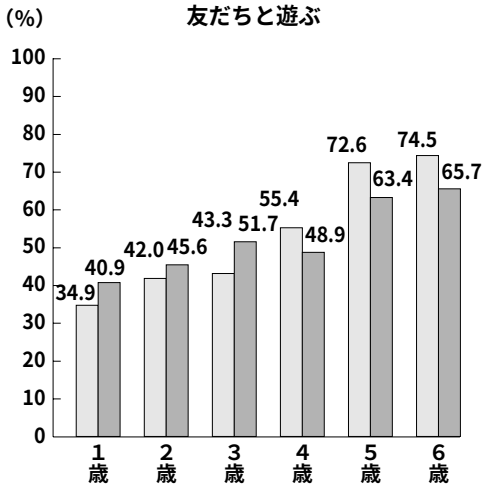
95年　00年　＊複数回答











〔回答数〕

	95年	00年
１歳	129人	298人
２歳	459人	761人
３歳	307人	418人
４歳	513人	364人
５歳	219人	377人
６歳	192人	385人

就園状況別平日の遊び相手（図１－52）

図１－52は、就園状況によって、平日の遊び相手をたずねた結果の前回との比較である。前回と比較して、母親と一緒に遊ぶ割合は増加しているが、その他で大きな変化は見られない。就園状況によって、平日の遊び相手はかなり異なっている。

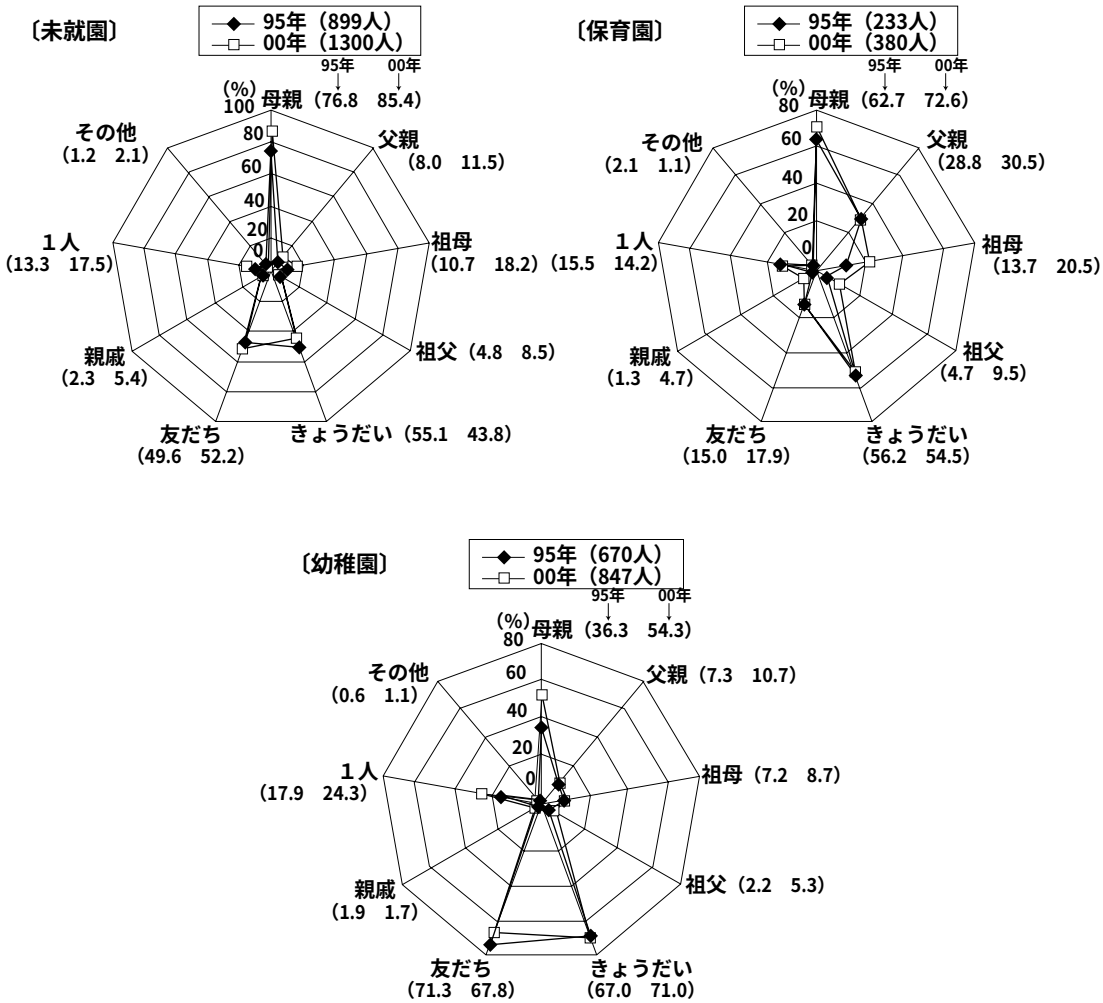
・未就園児は、母親、きょうだい、友だちと遊ぶ割合が多い。
・保育園児の場合、母親、きょうだいと遊ぶ割合が高く、友だちが低い。また、他の子どもと比較して、父親の割合が高くなっている。
・幼稚園児は、母親が低くなり、きょうだい、友だちの割合が高いが、ほぼ、未就園児と似た傾向を示している。

遊び場所について（図１－53・54）

図１－53は、遊び場所について複数回答（２つ選択）でたずねた結果を前回と比較し

図１－52　平日の遊び相手×就園状況（95年との比較）

＊複数回答



たものである。前回と比較して増加したのは「近所の空き地や公園」7.2ポイント、「自宅」3.8ポイント、「学校などの運動場」3.2ポイントなどであった。

最も減少したのは、「友だちの家」4.2ポイントであった。友だちと一緒に遊ぶ割合は、年齢が上がるほど高くなる傾向にあるが、前述したように、平日の遊び相手としての友だちの割合は、前回よりも４～６歳児で減少していることから、このような結果につながったと思われる。

さらに、今回の全体数値を年齢別に分析したのが図１－54である。これを見ると、すべての年齢において、「自宅」が８割弱～９割弱と一定して高い。年齢が上がるにつれて、「友だちの家」が２割弱から５割弱に上がっていき、一方、「近所の空き地や公園」は、４割から３割に下がる傾向にある。これは、よくする遊びの年齢別で見られたように、年齢が上がるにつれて、室内遊び（「テレビゲーム」や「絵を描く」など）をする割合が高くなることと一致していると考えられる。

●第1章
▼遊びについて ▼Q9 ▼集計表P.153・156

図１－53　遊び場所（95年との比較）

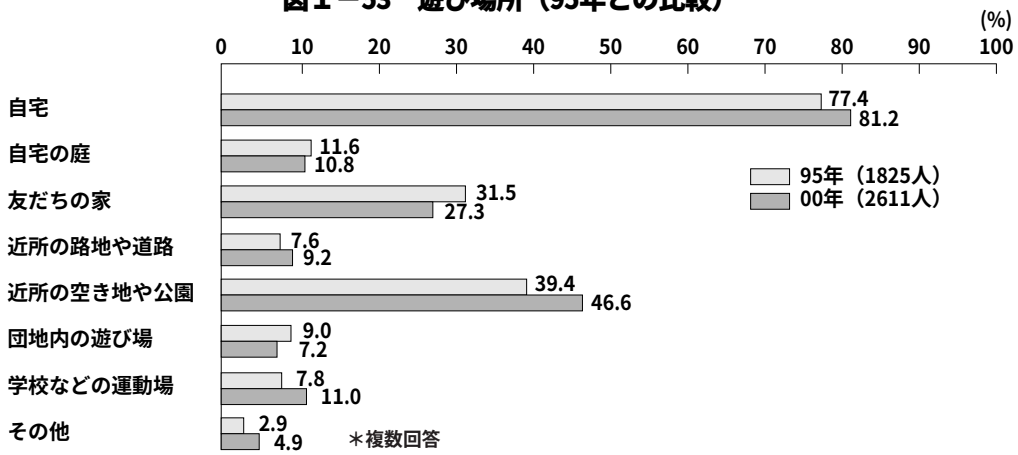
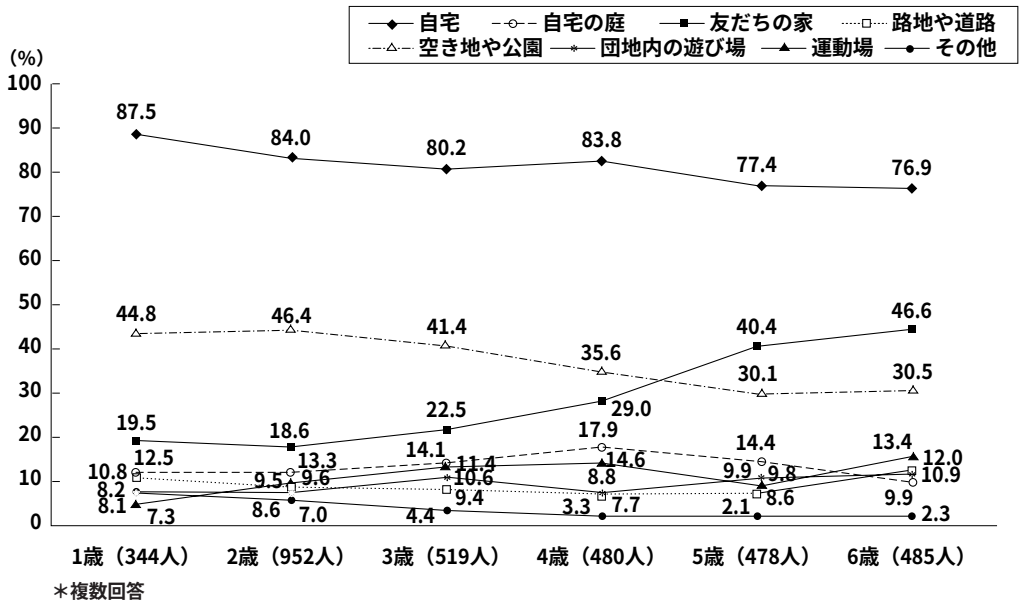


図１－54　遊び場所×年齢（全体）



5 保護者の教育観

子どもへの進学期待（図１－55・56）

図１－55は保護者が自分の子どもをどの学校段階まで進学させたいのかについてたずねたものの前回との比較である。６割の保護者が「大学卒業まで」と答えている。しかし、前回より5.4ポイント下がり、逆に「高校卒業まで」は5.8ポイント上がっている。

その理由はいろいろと考えられるが、１つは母親自身の学歴と関連があると思われる。図１－56の今回の首都圏のデータから、四年制大学卒業の母親の83.6%、短大卒業の母親の74.3%、高校卒業の母親の53.1%が、自分の子どもに「大学卒業まで」望んでいることがわかった。高学歴（四年制大学卒）の保護者は子どもへの進学期待が高い傾向が見られた。しかし今回は、高学歴の母親は前回の20.3%より5.3ポイント減り、15.0%となっている。これが子どもの高学歴への期待が下がった結果につながったと思われる。もう１つの理由は、図１－56のグラフを見てもわかるように、前回と比較して、今回は高校卒業の母親の子どもへの大学進学期待が下がった（前回61.1%、今回53.1%。8.0ポイント減少）ことにある。今、学歴崩壊、終身雇用が崩れつつある社会になってきているので、子どもへの進学期待に昔ほどこだわらなくなったようである。また不景気のせいもあるかもしれない。ちなみに、大学卒業の親の子どもへの進学期待は前回とほとんど変わらなかった。

また性別で見ると、７割の保護者が男の子に大学まで進学してほしいと考えているのに対して、女の子の場合は、５割弱である。

図1－55　子どもへの進学期待（95年との比較）

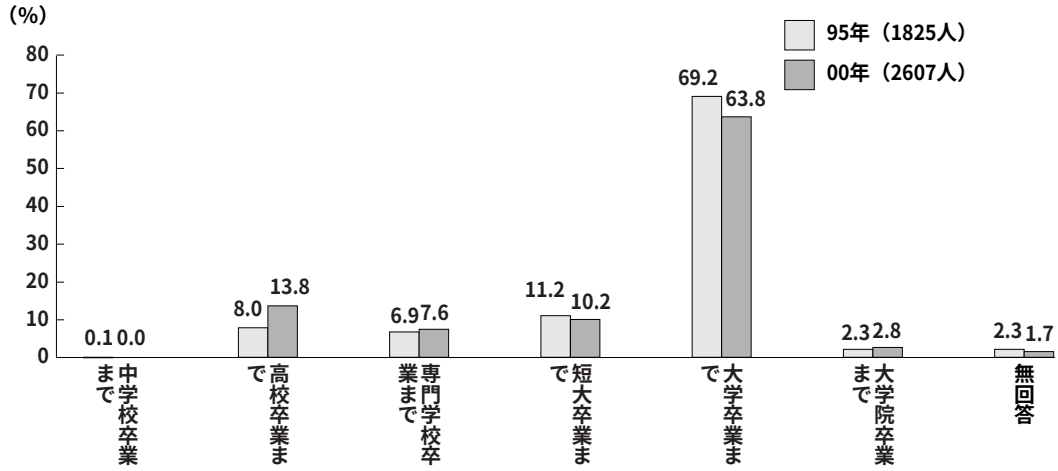
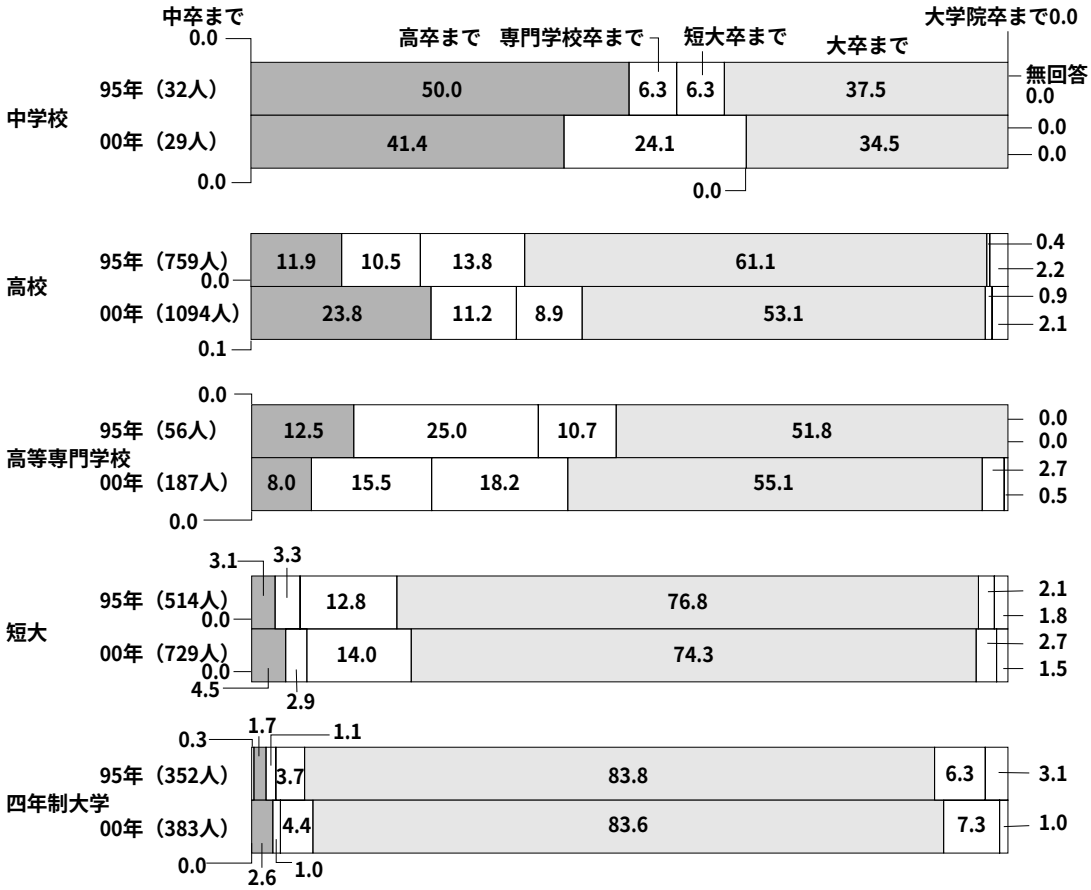


図１－56　子どもへの進学期待×母親の学歴（95年との比較）　(%)



教育費（図１－57）

子ども１人当たりにかける１か月の教育費についてたずねてみた。図１－57は前回との比較である。

グラフを見てわかるように、就学前の子どもに大体「1,000円～5,000円未満」（今回41.9%）の教育費をかけていることがわかった。また、前回と比較して大きな変化は見られなかったものの、「10,000円未満」は、前回は70.5%、今回は74.9%と、4.4ポイント増えている。一方、「10,000円以上」は、前回は26.9%、今回は24.1%と、2.8ポイント減っている。多少ではあるが、経済不況の影響があるのではないかと思われる。

ちなみに子どもの年齢別で見ると、年齢が上がるにつれて、教育費が上がることがわかった。

子どもの成長への満足度（図１－58）

自分の子どもの成長ぶりに満足しているかをたずねてみた。その結果を前回と比較したのが図１－58である。

「とても満足している」と「まあ満足している」を合わせた数値では、前回も今回もほぼ同じである。しかし詳しく見ると、「まあ満足している」は前回より9.9ポイント下がっている。一方、「とても満足している」は前回より10.0ポイント上がっている。子どもの年齢・就園状況・母親の就業状況別で見ても、「とても満足している」はすべて前回より高い数値を示している。前回と比べると、保護者は子どもの成長ぶりにより満足していると言えよう。保護者の子どもの成長への高い満足度を見ると、ほとんどの家庭で子育てへのストレスなどがあるにせよ、子どもの成長ぶりに満足している。しかも満足度が高くなっていて、子育て状況の健全さがうかがえる。

図１－57　1か月の教育費（95年との比較）

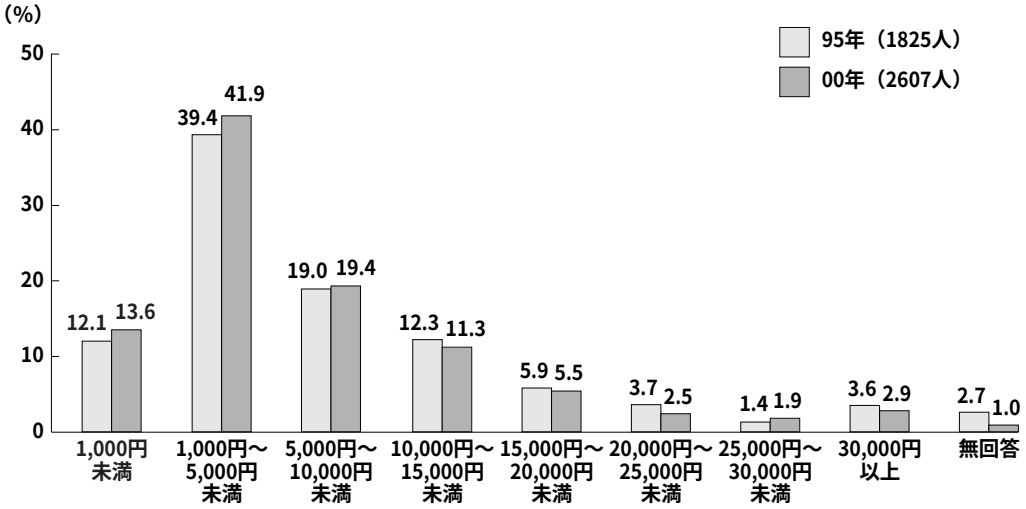
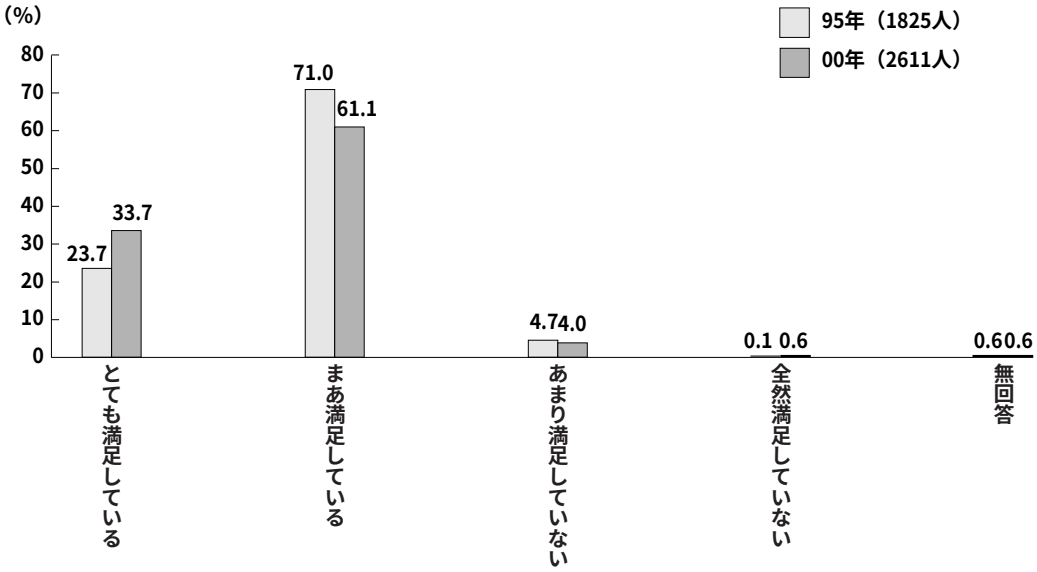



図１－58　子どもの成長への満足度（95年との比較）